
土地分類基本調査

下田・神子元島

5 万分の 1

国 土 調 査

静 岡 県

1 9 8 2

序 文

本県では、健康で文化的な生活環境の確保と県土の均衡ある発展を図ることを基本理念として、人間性豊かな地域社会づくりを進めております。

このためには、限りある土地資源を適正かつ有効的に利用することが極めて重要な課題となり、基盤である県土の実態を総合的に把握することが必要となります。

さいわい、国土調査事業ではこれに対応する手段として、土地についての質的調査を土地分類調査、量的調査を地籍調査、水関係の量及び質的調査として水調査、の三つの制度があり、この制度に基づき適正な土地利用計画を行うための基礎資料を作成しております。

本県においては、この制度を活用して土地分類調査を昭和45年度より15図幅、地籍調査を昭和28年度より940haの区域で調査を完了させ、更に水調査についても昭和55年度からそれぞれ実施しております。

本来、国土調査事業は前述の三つの制度が足並みを揃えることにより、総合的にその機能を果たすものでありますが、今日までの実施状況は、その事業進捗とあわせてかならずしもバランスのとれた充分なものとはいえません。特に地籍調査については、市町村における土地利用に関する諸行政の企画、立案、事業計画の策定、事業にともなう用地買収等の基礎資料として広範囲に活用され、望ましい計画の樹立と事業の円滑な実施、能率の向上と経費の節減に大きく貢献する調査であります。

また、土地分類調査については、すでに完了した15図幅及び今回とりまとめた下田、神子元島図幅等は、その地域における地形、地質及び土壌など土地に関する要素の特性を総合的に把握することによって、地籍調査の活用をはかると共に、各種土地開発、並びに土地保全計画等の基礎資料として市町村行政面に大きく貢献する調査であります。

従いまして、本調査事業の進捗アップが更に進展するよう、今後とも関係市町村各位の尚一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

なお、本調査の実施に当たって御協力いただきました関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御協力をお願いする次第です。

昭和57年3月

静岡県農地森林部長 鈴木和可

ま え が き

1. 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導をえて実施したものである。
2. 本調査の成果は国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査の実施、成果の作成機関および関係担当者は下記のとおりである。

総合企画調整編集	静岡県農地森林部 農地企画課	部技監兼 課長 係長 主任 技師	東川光雄 鈴木忠四郎 新田三次郎 山田忠志
地形調査	静岡英和女学院 短期大学	教授	北川光雄
傾斜区分調査	〃	〃	〃
水系谷密度調査	〃	〃	〃
表層地質調査	静岡大学理学部	教授	土隆一
	〃	助教授	黒田直
	〃	助手	茨木雅子
土壌調査	静岡県農業試験場	化学部長	川口菊雄
	〃	技師	高橋和彦
	〃 林業 〃	研究主幹	縣富美夫
	静岡大学農学部	教授	加藤芳朗
	東京農工大学農学部	助教授	浜田竜之介
土地利用現況調査	静岡県農地森林部 林政課	主任	阿部卓
	静岡県農業試験場	化学部長	川口菊雄
	〃	技師	高橋和彦
協 力	東京農工大学農学部	教授	黒部隆
	静岡県沼津土地改良 事務所 賀茂支所	主任	鈴木治夫

目 次

序 文

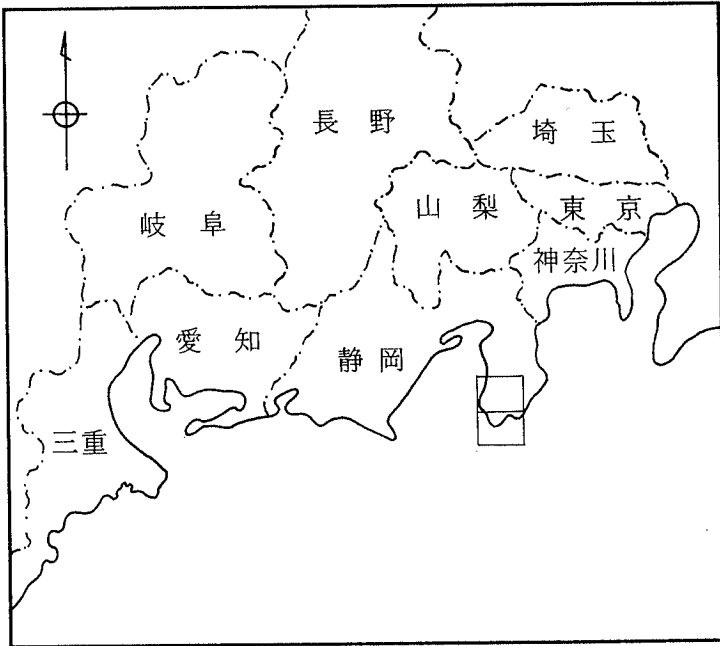
総 論

I 行 政 区 画	1
II 人 口	2
III 図幅内の地域の特性	6
IV 主要産業の概要	13

各 論

I 地 形 分 類 図	27
II 表 層 地 質 図	45
III 土 壤 図	47
IV 傾 傾 区 分 図	54
V 水 系 谷 密 度 図	56
VI 土 地 利 用 現 況 図	58

位 置 図



総

論

I 位置及び行政区画

1 位置

「下田、神子元島」図幅は、伊豆半島の南部に位置し東側は相模灘、西側が駿河湾、南側は大平洋と三方を海に囲まれた東経 $138^{\circ}44'$ ～ $139^{\circ}00'$ 、北緯 $34^{\circ}30'$ ～ $34^{\circ}50'$ の範囲で、図幅内面積は約 847 km^2 、このうち陸地面積は 467 km^2 である。

2 行政区画

「下田、神子元島」に関する行政区は第1図に示す下田市、南伊豆町、東伊豆町、河津町、松崎町、西伊豆町、天城湯ヶ島町、賀茂村の1市6町1村の8行政区である。

なお、市町村の面積及び図幅内占有率は第1表に示す通りである。

第1図 行政区図



第1表 図幅

区 分	市町村名	下 田 市	南伊豆町	松 崎 町	河 津 町
市町村全体面積	A (km ²)	104.59	110.35	84.69	101.29
図幅内面積	陸地B (km ²)	104.59	110.35	84.69	90.61
	構成比 (%)	22.4	23.6	18.1	19.4
	B / A	100.0	100.0	100.0	89.5

資料：市町村全体面積は、昭和54年度全国都道府県市区町村別面
注) 図幅内陸地面積は5万分の1地形図(国土地理院発行)よ

Ⅱ 人 口

1 人口の動向

本地域における昭和55年10月1日現在の人口は101,788人である。昭和40年以降減少していた人口は45年から増加に転じ、50年では40年の水準まで回復したがその後は再び減少傾向にある。

5階層による年齢別構成を昭和40年と55年について対比してみると、0～14才と15～29才の人口が減少傾向をみせ、30～44才、45～64才、65才以上の人口が増加している。29才以下の人口構成比は昭和40年では48.8%(県全体55.2%)であったが、55年では36.9%(県全体44.8%)まで下り、65才以上の人口は9.2%(県全体6.3%)から13.5%(県全体9.0%)へと増加している。これは全体的に若年層が減少し老令化が進行しているためで、この傾向は県全体よりも急速に進んでいる。

内市町村面積

西伊豆町	東伊豆町	天城湯ヶ島町	賀茂村	計	備考
65.59	77.91	133.51	39.46	717.39	
56.58	4.55	3.59	12.87	467.83	
12.1	1.0	0.8	2.8	100.0	
86.3	5.8	2.7	32.6	65.2	

積調（国土地理院）による。

り計測した。

一方、世帯数については各市町村とも増加傾向にあり昭和40年の23,425戸から55年には30,604戸へと1.31倍の伸びを示している。これは一世帯当たりの人口が昭和40年の4.4人から55年には3.3人へと減少し核家族化が進行しているためである。

第2表 市町村別

区分		市町村名		下田市	南伊豆町	松崎町	河津町
昭和50年	人口	人	男	15,138	5,795	4,816	4,641
		女	計(A)	16,562	6,222	5,521	5,131
	世帯数	計(A)	31,700	12,017	10,337	9,772	
昭和55年	人口	人	男	14,799	5,666	4,729	4,560
		女	計(B)	16,208	6,056	5,284	4,949
	世帯数	計(B)	31,007	11,722	10,013	9,509	
比較増減	人口	人	男	△ 339	△ 129	△ 87	△ 81
		女	計	△ 354	△ 166	△ 237	△ 182
	世帯数	計	△ 693	△ 295	△ 324	△ 263	
人口伸び率 B/A				0.98	0.98	0.97	0.97

資料：国勢調査（10月1日現在）

第3表 年令別

年度 区分	40年				45年			
	地域計	率	県計	率	地域計	率	県計	率
0~14才	27,028	26.0	776,319	26.7	23,681	23.0	765,233	24.8
15~29才	23,712	22.8	829,068	28.5	22,553	21.9	847,213	27.4
30~44才	23,062	22.1	639,189	21.9	23,327	22.7	714,966	23.1
45~64才	20,757	19.9	482,041	16.6	22,528	21.9	544,292	17.6
65才以上	9,578	9.2	185,904	6.3	10,806	10.5	218,191	7.1
合計	104,137	100	2,912,521	100	102,895	100	3,089,895	100
世帯数	25,044		653,960		27,252		755,745	
人口増減率	—		—		98.8		106.1	
世帯増減率	—		—		108.8		115.6	

資料：国勢調査

人口及び世帯数

西伊豆町	東伊豆町	天城湯島町	賀茂村	計	摘要
4,905	8,225	4,069	2,321	49,910	
5,209	9,099	4,374	2,518	54,636	
10,114	17,324	8,443	4,839	104,546	
2,814	4,999	2,136	1,309	29,592	
4,703	8,148	3,905	2,204	48,714	
5,018	8,882	4,226	2,451	53,074	
9,721	17,030	8,131	4,655	101,788	
2,877	5,284	2,145	1,335	30,604	
△ 202	△ 77	△ 164	△ 117	△ 1,196	
△ 191	△ 217	△ 148	△ 67	△ 1,562	
△ 393	△ 294	△ 312	△ 184	△ 2,758	
63	285	9	26	1,012	
0.96	0.98	0.96	0.96	0.97	

人口の推移

50年				55年				備考
地域計	率	県計	率	地域計	率	県計	率	
23,400	22.4	825,424	24.9	21,669	21.3	832,816	24.2	
20,227	19.3	802,041	24.2	15,892	15.6	708,801	20.6	
23,368	22.4	773,533	23.4	23,136	22.7	843,220	24.5	
25,417	24.3	646,944	19.6	27,355	26.9	749,185	21.7	
12,134	11.6	260,857	7.9	13,736	13.5	312,782	9.0	
104,546	100	3,308,799	100	101,788	100	3,446,804	100	
29,592		868,333		30,604		969,904		
101.6		107.1		97.4		104.2		
108.6		114.9		103.4		111.7		

Ⅲ 図幅内の特性

1 地 勢

本図幅の地域は伊豆半島南部にあたり、南伊豆、奥伊豆などよばれる。北西部の天城火山、南西部の蛇石火山をのぞくとほとんどが非火山性山地で、第三紀層の湯ヶ島層群、白浜層群からなる中～低山性山地である。山地のしめる面積は広く、下田市87%、南伊豆町86%、松崎町78%、などの値をもつ。

東は相模灘、西は駿河湾に面し、南端の石廊崎がその海域をわけているが、海岸は海食による海食崖が顕著で、平坦地は河川の河口の沖積地にみられる、浜の発達も限られ、白浜、弓ヶ浜はその例である。また出入りのおおい海岸の湾奥には集落と漁港が発達するが津波、高潮の被害をおおくうけてきた。しかし、海岸の侵食による地形は風景美にめぐまれて国立公園にふくまれて、天然記念物の指定地もみられる。

河川は二級河川の流域がおおいが、上流部では峡谷や滝を形成し、温泉の分布とともに観光地化した所もある。段丘地形はおもに中流域に発達して平坦地を提供しているが、堆積地の下刻にともなう段化と考えられ、規模は小さい。水系にそう谷筋は重要な交通路であり、天城峠、娑婆羅峠、蛇石峠、大鍋越などは山地をこえる地点となる。

降水量にめぐまれて森林の育成もよく、森林資源にめぐまれ、かつての薪炭産地であったし、林産物の産地でもある。また海岸ぞいは気温が高く、無霜地帯も分布し、急斜面を段々畑にかえて花卉栽培をおこなってきたが、その栽培景観は独特の風物をもつ。

南伊豆は地震や集中豪雨にともなう災害をおおくうけ、活断層、山地傾面崩壊、土石流、地すべり、洪水はらんなど、土地条件に対応した被害をうけてきた。地域開発や土地改変にあたっては、治山、治水をはじめ、防災的措置もふくめて地域の特性を把握することがこの地域にとっては重要な点と考えられる。

2 気 象

伊豆半島の南部に位置する本図幅地域は、海洋性気候の特徴を示し、全国的にみても極めて気候が温暖で平均気温も16℃前後と恵まれた気象条件にある。

しかし、中央山間地帯の内陸部に位置する天城湯ヶ島町などでは、気温の較差も大きく、降雪もみられ寒冷が厳しいにくらべ、海流の影響を受ける沿岸部の

気候は温和で、石廊崎における1月の平均気温も7.7℃と非常に暖かく海岸線に沿った地域には無霜地帯もあり南伊豆や河津町、賀茂村などはカーネーション、キク等の露地栽培も盛んである。

降水量は、沿岸部では1,900mm～2,400mmであるのに対し、本県3多雨地域のひとつである天城山城をひかえる湯ヶ島観測所では年平均降水量が3,155mmに達し、静岡市の2,300mmに比べて3割以上も多い降水記録を残している。

昭和51年7月11日の集中豪雨により伊豆半島南部は大きな災害をうけ、死傷者42人、浸水家屋6,598戸、崖ぐずれ502箇所、田畑の流出・埋没・冠水は230haに及び昭和33年の狩野川台風以来の大被害を受けたことは記憶に新しい。

第4表 気 象 表（昭和36年～昭和55年、20年平均値）

月別 区別	観測所	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
最高気温	石廊崎	10.3	10.7	12.9	16.8	20.3	22.9	26.2	28.0	25.6	21.1	17.3	13.1	18.8
	松崎	11.2	12.1	14.8	19.5	23.3	25.7	29.2	31.1	28.0	23.3	19.0	14.3	21.0
	稲取	11.0	11.5	13.6	18.3	21.8	24.3	28.0	29.5	26.6	21.7	18.0	13.8	19.9
	湯ヶ島	9.4	10.2	13.3	18.5	22.7	25.5	28.8	30.4	26.6	21.1	16.8	12.3	19.6
最低気温	石廊崎	5.3	5.3	7.5	11.9	15.6	18.9	22.3	23.8	21.4	16.8	12.5	8.2	14.1
	松崎	2.3	2.5	4.9	9.8	13.4	17.6	21.6	22.5	19.4	13.8	9.1	4.7	12.0
	稲取	3.2	3.5	5.5	10.8	14.2	17.8	21.7	23.0	20.1	15.1	11.1	6.1	12.7
	湯ヶ島	-0.5	-0.1	2.6	7.8	11.9	16.1	20.3	21.0	17.9	12.0	6.9	1.9	9.8
平均気温	石廊崎	7.7	7.9	10.2	14.3	17.9	20.7	24.0	25.7	23.3	18.9	14.9	10.6	16.3
	松崎	6.8	7.3	9.9	14.7	18.4	21.7	25.4	26.8	23.7	18.6	14.1	9.5	16.5
	稲取	7.1	7.5	9.6	14.6	18.0	21.1	24.9	26.3	23.4	18.4	14.6	10.0	16.3
	湯ヶ島	4.5	5.1	8.0	13.2	17.3	20.8	24.6	25.7	22.3	16.6	11.9	7.1	14.7
降水量	石廊崎	75.9	80.4	139.7	165.0	219.0	255.0	193.4	165.9	199.0	166.8	119.6	76.5	1,856.3
	松崎	77	79	142	169	226	283	211	228	213	146	148	94	2,047
	稲取	74	96	189	265	293	350	258	221	246	180	147	94	2,462
	湯ヶ島	103	133	248	284	312	405	409	397	352	289	165	104	3,155

資料：静岡地方気象台資料

注：石廊崎観測所（昭和26年～昭和55年、30年平均値）

3 就業構造

本地域の昭和55年10月現在における産業別就業人口の比率は、第1次産業、17.5%、第2次産業20.3%、第3次産業62.2%である。

これを昭和50年とくらべると第1次産業が2.1%、第2次産業が0.1%それぞれ減少し第3次産業は2.2%増加している。このように本地域の就業構造は第2次産業は余り変化がなく、第1次産業の減少分を第3次産業が吸収して増加していることが特色となっており、中でも卸売り、小売業が著しい伸びを示している。

また、昭和55年におけるサービス業の比率は30.9%で最も高く卸売、小売業が20.3%でこれに続いている。これに対してかつて高い割合を占めていた農業は12%以下に落ち込んでいる。

第5表 産業分

分類 市町村	総数	第一次産業				第二	
		農業	林業	水産業	計	鉱業	建設業
県全体	1,743,584	165,843	4,849	13,707	184,399	1,733	147,426
下田市	15,519	961	54	472	1,487	10	1,520
南伊豆町	6,050	1,092	26	316	1,434	3	723
松崎町	5,143	794	63	211	1,068	8	660
河津町	4,798	1,227	126	66	1,419	6	548
西伊豆町	5,110	331	46	828	1,205	10	438
東伊豆町	8,636	1,002	27	193	1,222	0	1,050
天城湯ヶ島町	4,451	599	124	9	732	44	427
賀茂村	2,313	218	10	288	516	131	188
地域計	52,020	6,224	476	2,383	9,083	212	5,554

資料：国勢調査（昭和55年10月1日現在）

4 観光と交通

a 観光

富士、箱根、伊豆国立公園は、わが国でもっとも先進的な観光地のひとつで利用者の多い国立公園として親しまれている。

伊豆半島の南部に位置する本図幅内の地域は自然景観に恵まれ豊かな温泉や

市町村別にみると河津町、南伊豆町、西伊豆町、賀茂村では立地条件の特色を生かした花卉栽培、施設園芸等の農業及び水産業が盛んで第1次産業の比率は、29.6%～22.3%を占め県平均の10.6%を大幅に上廻っている。一方先進的観光地として著名な下田市、東伊豆町は全就業者の7割以上を占める第3次産業の約8割がサービス業、卸売、小売業で観光が非常に重要な位置にあることがうかがえる。

この他、賀茂村ではガラスの原料となる珪石の採掘が盛んで鉱業就業者が多く、第2次産業の割合も地域で最も高くなっている。

なお、就業動向を総人口に対する比率でみると51.1%で昭和50年と同率であるが県平均の50.6%をわずかで上廻っている。

類別就業者数

次産業		第三次産業				分類 不能	構成比		
製造業	計	小売業 卸売業	サー ビス業	その他	計		第一次 産業	第二次 産業	第三次 産業
539,860	689,019	364,781	299,756	205,109	869,646	520	10.6	39.5	49.9
1,217	2,747	4,128	4,920	2,237	11,285	0	9.6	17.7	72.7
292	1,018	1,147	1,825	626	3,598	0	23.7	16.8	59.5
568	1,236	995	1,325	517	2,837	2	20.8	24.0	55.2
265	819	764	1,300	496	2,560	0	29.6	17.1	53.3
951	1,399	879	1,184	441	2,504	2	23.6	27.4	49.0
192	1,242	1,613	3,757	799	6,169	3	14.2	14.4	71.4
823	1,294	767	1,314	342	2,423	2	16.5	29.1	54.4
505	824	260	437	276	973	0	22.3	35.6	42.1
4,813	10,579	10,553	16,062	5,734	32,349	9	17.5	20.3	62.2

名所旧跡、さらに多くの文化財など、観光資源も豊富で昭和55年度の観光入込数は1,631万人に達している。

代表的観光地としては、ハリスが滞在中日本最初の領事館が置かれた玉泉寺、

唐人お吉が眠る宝福寺（下田市）、自然の景観に恵まれた伊豆半島最南端の石廊崎、野猿の生息地として名高い波勝崎、コテ絵の名工入江長八の作品を展示した長八記念館（松崎町）、伊豆西海岸随一の景勝地ともいわれる堂ヶ島、川端康成の名作「伊豆の踊り子」の舞台として有名な温ヶ野温泉（河津町）、など数多く、本地域の観光にとって最も重要な資源である温泉も温量が豊富で全域に分布している。

第6表 温泉

温泉名	所在地	平均温度	泉質	温泉名	所在地
横川温泉	下田市横川	45℃	単純温泉	峰温泉	河津町峰
河内 "	"	49	弱食塩泉	温ヶ野 "	" 温ヶ野
蓮台寺 "	" 蓮台寺	54	単純温泉	七滝 "	" 七滝
下田 "	" 全市	31	"	河津浜 "	" 河津浜
熱川 "	東伊豆町熱川	80~100	含重曹食塩泉他	宇久須 "	賀茂村
大川 "	" 大川	70	含芒硝他	下賀茂 "	南伊豆町 下賀茂
北川 "	" 北川	110	含石膏他	"	" 加納
南熱川 "	" 片瀬	80~100	含芒硝他	弓ヶ浜 "	" 弓ヶ浜
白田 "	" 白田	80~100	"	大沢 "	松崎町大沢
稲取 "	" 稲取	80	"	松崎 "	" 松崎
今井浜 "	河津町今井浜	45	弱食塩泉	岩地 "	" 岩地
谷津 "	" 谷津	100	含芒硝弱塩泉他	石部 "	" 石部

b、交 通

三方を海に囲まれている本地域の交通は道路、鉄道及び海上の3体系から成っている。

主要道路としては東海岸を国道135号線、西海岸を国道136号線が、更に中央山間部を国道414号線が走り経済活動の基幹道路として下田市に通じている。

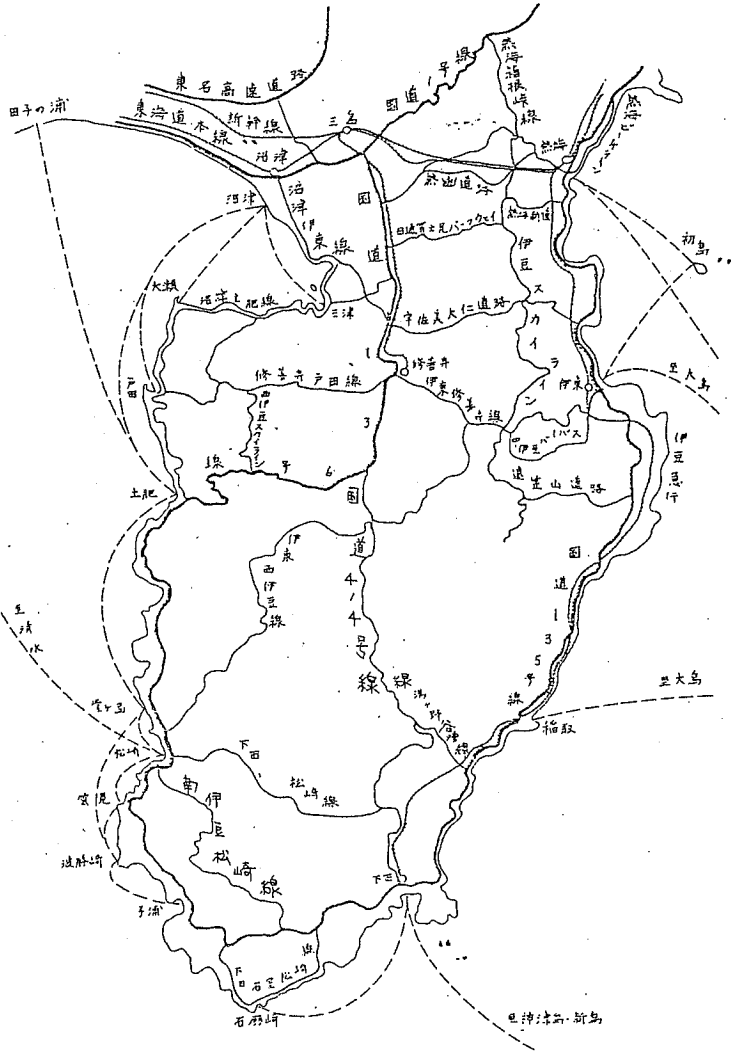
また、国鉄伊東線に接続する伊豆急行線が本地域唯一の鉄道として東海岸を下田市まで1日42往復運行して地域経済の動脈となっている。

一方海上交通は松崎港から沼津航路、清水航路、下田港から新島、神津島航路等の他、石廊崎や子浦、堂ヶ島などの地域内航路も運行されている。

一 覧 表

平均温度	泉 質	温 泉 名	所 在 地	平均温度	泉 質
100℃	炭酸泉	雲見温泉	松崎町雲見	38℃	含石膏硝泉
52	石膏泉	堂ヶ島〃	西伊豆町仁科	32	単純温泉
45	弱食温泉	浮島〃	〃	47	含塩化上類食塩泉
70	〃	大沢里〃	〃 大沢里	39	単純温泉
36	石膏	月ヶ瀬〃	天城湯ヶ島町 月ヶ瀬	60	含芒硝苦味泉
100	食塩泉	吉奈〃	〃 吉奈	73	〃
〃	〃	嵯峨沢〃	〃 嵯峨沢	55	硝苦味泉
		湯ヶ島〃	〃 湯ヶ島	50	重炭酸土類泉
55	石膏泉	船原〃	〃 船原	43	単純温泉他
56.5	含石膏硝泉				
64	〃				
50	〃	計	33地区		

第2図 伊豆の交通網



Ⅳ 主要産業の概要

1 農 業

本地域の基幹産業として重要な地位を占めてきた農業は、観光開発の進展、後継者の流出、経営耕地面積が狭少、などからその地位は年々低下している。

昭和50年の農業就業人口は7,299人でこの5年間に1,075人(14.7%)、農家戸数は613戸(7.9%)それぞれ減少したが専業農家は24戸(2.6%)増加している。また第2種兼業農家の占める割合は75.6%と高く県平均(64.6%)を大幅に上廻っている。

一方、経営耕地面積は第8表に示した農用地面積率(6.6%)からもうかがえるように1戸当たり0.36haと極めて狭く県平均(0.6ha)の6割にとどまっております。東海岸沿いの東伊豆、河津町の方が西海岸の市町村を上廻っている。生産動向の推移は昭和50年の総生産額6,795百万円から昭和55年は7,874百万円へと1.16倍の増加を示しているものの、農家1戸当たりの生産額としては1,108千円で農外収入に依存せざるを得ない状態である。

昭和55年度の作物別生産額の割合は第1位が「畜産」の27.4%、第2位が「果実」の20.7%、第3位が「花卉」の17.7%となっており生産地別には東海岸の河津町、東伊豆町ではカーネーション、キク等の花卉類、柑橘及びブロイラー等の畜産を主力とし、南海岸の下田市、南伊豆町ではカーネーション、マーガレット等の花卉、キヌサヤエンドウ、キュウリ、トマト等の野菜類及び畜産物が米と共に農業生産額の主体をなしている。また西海岸の松崎町、西伊豆町でもマーガレットやキヌサヤエンドウを始めとする花卉、野菜類の栽培が盛んで賀茂村の鶏卵、カーネーション等と共に地域における重要な産物として産地を形成している。この他特産品である“わさび”の栽培は天城湯ヶ島町に集中しており、県全体の生産量391tの38%に当たる148tを本地域で生産してその大半を東京市場に出荷している。

経営規模が零細で生産性が低い本地域の農業が温暖な気象条件のもとに地域の特性をいかに活用して生産性を高め、農家所得を向上して行くかが今後の課題であろう。

第7表 専業、

区 分	総 農 家 数			専 業 農 家			第 1
	昭和50年	昭和55年	対50年比	昭和50年	昭和55年	対50年比	昭和50年
静 岡 県	140,127	132,037	94.2	17,436	16,665	95.6	36,069
下 田 市	1,278	1,194	93.4	91	120	131.9	142
南 伊 豆 町	1,626	1,438	88.4	115	150	130.4	167
松 崎 町	1,387	1,207	87.0	130	139	106.9	105
河 津 町	1,065	954	89.6	261	228	87.4	151
西 伊 豆 町	418	400	95.7	46	57	123.9	41
東 伊 豆 町	752	766	101.9	176	161	91.5	154
天城湯ヶ島町	872	845	96.9	46	42	91.3	88
賀 茂 村	318	299	94.0	48	40	83.3	25
地 域 計	7,716	7,103	92.1	913	937	102.6	873
構 成 比	100.0	100.0		11.8	13.2		11.3

資料：農林業センサス（昭和55年2月1日現在）

第8表 農用地面積

区 分	県 全 体		下 田 市		南 伊 豆 町		松 崎 町		河 津 町	
	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比
1 農用地面積	109,738	14.1	821	7.8	1,132	10.3	605	7.1	724	7.2
田	42,106	5.4	410	3.9	536	4.9	297	3.5	261	2.6
畑	67,632	8.7	411	3.9	596	5.4	308	3.6	463	4.6
2 森林面積	506,269	65.1	7,967	76.2	8,581	77.7	7,245	85.6	8,364	82.5
民 有 林	409,844	52.7	7,703	73.7	8,217	74.4	6,469	76.4	4,936	48.7
国 公 有 林	96,425	12.4	264	2.5	364	3.3	776	9.2	3,428	33.8
3 宅地その他	161,257	20.8	1,672	16.0	1,322	12.0	620	7.3	1,041	10.3
行政面積	777,264	100	10,460	100	11,035	100	8,470	100	10,129	100

資料：1. 行政面積は建設省国土地理院「全国都道府県市町村別面積
 2. 農用地及び宅地、その他の面積は県市町村課「固定資産に
 3. 森林面積は県林政課「静岡県林業統計要覧」による。（昭

兼業別農家数

種兼業農家		第2種兼業農家			経営耕地面積				
昭和55年	対50年比	昭和50年	昭和55年	対50年比	田	普通畑	果樹園	茶園	1戸当たり
30,154	83.6	86,622	85,218	98.4	0.34	0.13	0.41	0.30	0.60
126	88.7	1,045	948	90.7	0.20	0.08	0.19	0.09	0.32
148	88.6	1,344	1,140	84.8	0.21	0.09	0.22	0.03	0.33
83	79.0	1,152	985	85.5	0.15	0.04	0.17	0.02	0.27
130	86.1	653	596	91.3	0.18	0.06	0.36	0.05	0.47
39	95.1	331	304	91.8	0.14	0.06	0.11	0.06	0.21
143	92.9	422	462	109.5	0.18	0.09	0.61	0.02	0.66
98	111.4	738	705	95.5	0.25	0.06	0.08	0.03	0.33
28	112.0	245	231	94.3	0.13	0.04	0.10	—	0.18
795	91.1	5,930	5,371	90.6	0.19	0.07	0.31	0.03	0.36
11.2		76.9	75.6						

及び森林面積の概要

西伊豆町		東伊豆町		天城湯ヶ島町		賀茂村		地域計		摘要
(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	
278	4.3	568	7.3	470	3.5	98	2.5	4,696	6.6	
103	1.6	102	1.3	296	2.2	41	1.0	2,046	2.9	
175	2.7	466	6.0	174	1.3	57	1.5	2,650	3.7	
5,931	90.4	5,853	75.1	12,249	91.8	3,450	87.4	59,640	83.1	
3,668	55.9	4,063	52.1	6,835	51.2	3,225	81.7	45,116	62.9	
2,263	34.5	1,790	23.0	5,414	40.6	225	5.7	14,524	20.2	
350	5.3	1,370	17.6	632	4.7	399	10.1	7,406	10.3	
6,559	100	7,791	100	13,351	100	3,947	100	71,742	100	

調」による。(昭和54年10月1日現在)

関する概要調書」による。(昭和56年1月1日現在)

和55年12月31日現在)

第9表 主要

区 分	県 全 体		下 田 市		南 伊 豆 町		松 崎 町		河 津 町		
		構成比		構成比		構成比		構成比		構成比	
農業生産額	322,996	100	832	100	1,266	100	671	100	1,704	100	
耕 種	全 体	213,478	66.1	664	79.8	917	72.4	636	94.8	1,475	86.5
	米	31,846	9.9	222	26.7	259	20.5	189	28.2	77	4.5
	野菜	69,587	21.6	224	26.9	212	16.7	166	24.7	319	18.7
	果実	24,314	7.5	99	11.9	100	7.9	98	14.6	300	17.6
	花卉	12,452	3.8	63	7.6	215	17.0	52	7.7	656	38.5
	その他	75,279	23.3	56	6.7	131	10.3	131	19.6	123	7.2
畜 産	全 体	88,538	27.4	167	20.1	348	27.5	35	5.2	228	13.4
	乳用牛	15,910	4.9	21	2.5	46	3.6	4	0.6	2	0.1
	肉用牛	7,374	2.3	105	12.6	48	3.8	—	—	41	2.4
	豚	30,411	9.4	18	2.2	150	11.8	9	1.3	37	2.2
	鶏	34,084	10.6	21	2.5	102	8.1	23	3.0	139	8.2
	その他	759	0.2	2	0.3	2	0.2	2	0.3	9	0.5
養蚕加工農作物	20,980	6.5	1	0.1	1	0.1	—	—	1	0.1	
椎 茸 生産量	乾(t)	776.7		9.2		8.4		17.8		11.3	
	生(t)	1,968.5		19.5		12.5		34.2		25.9	

資料：静岡県農林水産統計年報による。（計算期間 昭和55年1月1日）
注：椎茸生産量については静岡県林業統計要覧による。（昭和55年）

2 漁 業

三方を海に囲まれている本地域には15の漁業地区があり沿岸、沖合、遠洋漁業の基地となっている。

昭和55年度の各漁業地区における経営体数は第10表に示すとおり1,129に達しているがその90.7%が個人経営で、さらにその52.9%が漁業を従として農業、民宿などを経営している兼業者である。昭和55年度の総水揚量は12,222tでありカツオ、マグロ、サバ、キンメダイなどを主体とする魚類が79.3%を占めイカ、エビ等の水産動物類が8.8%でこれに続いている。

農業粗生産額

(単位：百万円)

西伊豆町		東伊豆町		天城湯ヶ島町		賀茂村		地域計		摘要
	構成比		構成比		構成比		構成比		構成比	
541	100	1,356	100	1,092	100	412	100	7,874	100	
439	81.1	719	53.0	690	63.2	154	37.4	5,694	72.3	
50	9.2	15	1.1	208	19.1	25	6.1	1,045	13.3	
92	17.0	139	10.2	417	38.2	59	14.3	1,628	20.7	
14	2.6	348	25.7	25	2.3	12	2.9	996	12.6	
264	48.8	96	7.1	—	—	50	12.2	1,396	17.7	
19	3.5	121	8.9	40	3.6	8	1.9	629	8.0	
101	18.7	635	46.8	387	35.4	257	62.4	2,158	27.4	
10	1.8	—	—	20	1.8	28	6.8	131	1.7	
—	—	66	4.9	3	0.3	—	—	263	3.3	
—	—	415	30.6	85	7.8	—	—	714	9.1	
88	16.3	141	10.4	279	25.5	223	54.1	1,013	12.9	
3	0.6	13	0.9	—	—	6	1.5	37	0.4	
1	0.2	2	0.2	15	1.4	1	0.2	22	0.3	
9.1		12.5		34.5		5.6		108.4		
24.9		21.8		40.0		14.7		193.5		

日から同年12月31日までの1年間)

12月31日現在、生産額が明確でないため、参考として生産量のみ記載)

地域別にみると東海岸の東伊豆町では天然の良港「稲取港」を基地に沿岸、伊豆七島周辺で操業しておりカツオ、サバ等の魚類及びてんぐさ等の海草類が主力で農業と共に第1次産業の基幹をなしている。また河津町には良港がなく魚類は定置網を使ったブリ漁程度で、てんぐさ、貝類、エビ等の沿岸浅海漁業に限られている。南海岸の下田市には4つの漁業地区があり伊豆諸島沖のカツオ、銭洲沖のサバなど遠洋、沿岸漁業基地として重要な地位を占めている。南伊豆町ではサザエ、アワビ等の貝類、てんぐさ、わかめ等の海草類が中心で最近では漁家の民宿

経営が増加している。

一方、西海岸の松崎町では松崎、岩地、雲見の3漁港を拠点とした遠洋、沿岸漁業が盛んで特に貝類などの磯物、てんぐさ類は漁業の大きな収入源となっている。この他西伊豆町では田子漁港を基地とする遠洋漁業が古くから盛んで、カツオの一本釣りの歴史とともに水産加工業も栄えカツオは“田子節”“伊豆節”として全国的に名高い。また賀茂村では天然の良港といわれる安良里漁港を基地と

第10表 漁業経営体数

漁業地区		経営体数 合計	経営組織別経営体数			
			個人	会社	漁業協同 組合等	共同経営
静岡県	全体	4,469	4,083	131	29	226
東伊豆町	城東	19	18	1	—	—
	稲取	92	92	—	—	—
河津町	河津	26	23	1	—	2
下田市	白浜	69	60	—	—	9
	浜崎	136	135	1	—	—
	下田	51	49	2	—	—
	朝日	79	73	—	—	6
南伊豆町	竹麻	55	54	—	—	1
	南崎	107	107	—	—	—
南伊豆町	三坂	57	56	—	—	1
	三浜	115	100	—	1	14
松崎町	松崎	97	66	5	—	26
西伊豆町	仁科	85	83	1	—	1
	田子	72	52	17	1	2
賀茂村	賀茂	69	56	12	1	—
地域計	15	1,129	1,024	40	3	62
比率		100	90.7	3.5	0.3	5.5

資料：静岡県農林水産統計年報による。（昭和55年～56年）

してカツオ、サンマ、サバ漁を主体としているが、取る漁業から育てる漁業への転換としてハマチの養殖にも力を入れている。

200 カイリ問題に加えて海水の汚染や減少しつつある水産資源、後継者不足、獲る漁業から育てる漁業への転換等、本地域の漁業をめぐる課題はいずれも早期解決を迫られている。

の内訳及び水揚実績

専業別個人経営体数			水 揚 実 績 (単位：t)				
漁業のみ	漁業が主	漁業が従	魚 類	貝 類	水産動物類	海草類	合 計
445	1,743	1,895	528,942	2,739	3,299	1,562	536,542
—	5	13	362	15	8	66	451
5	50	37	606	48	29	126	809
1	4	18	353	2	11	28	394
—	20	40	42	4	4	108	158
19	59	57	170	52	63	237	522
8	20	21	7,095	8	248	8	7,359
—	28	45	—	33	6	11	50
1	13	40	17	16	43	22	98
5	51	51	33	111	64	169	377
—	16	40	10	42	12	13	77
1	60	39	526	73	97	38	734
1	22	43	226	17	64	78	385
11	40	32	118	2	296	117	533
10	17	25	122	3	122	—	247
—	15	41	14	3	11	0	28
62	420	542	9,694	429	1,078	1,021	12,222
6.1	41.0	52.9	79.3	3.5	8.8	8.4	100

3 商 業

昭和54年の商業統計調査によれば本地域の商店数は3,393店、従業者数は9,942人、年間販売額は1,024億円である。

商店数としては食料品小売業が1,059店で最も多く、飲食店が852店でこれに続いており両者で56%を占めている。商店は全般的に小規模で小売業の1店当たり売場面積は平均45㎡と県平均の55㎡に比べてはるかに小さい。年間販売額は昭和51年に対して3.8%（37億2,600万円）の増加であるが、県平均の増加率30.2%に比べると大幅に下廻っている。また1店当たりの販売額についても昭和51年の2,926万円から3,018万円へとわずか3.1%の伸びで購販力の流出が続いている。

第11表 商業

区分	商店数		売場面積		従業員数	
	51年	54年	51年	54年	51年	54年
市町村						
下田市	1,347	1,293	42,100	40,746	4,688	4,167
南伊豆町	341	337	9,143	11,275	901	811
松崎町	309	308	9,683	9,792	910	929
河津町	245	272	6,375	8,484	703	795
西伊豆町	325	352	8,477	9,123	1,081	1,082
東伊豆町	474	513	14,471	16,109	1,310	1,375
天城湯ヶ島町	199	184	7,364	7,085	555	527
賀茂村	132	134	3,272	3,467	258	256
地域計	3,372	3,393	100,885	106,081	5,718	9,942
県全体	80,608	85,572	2,659,145	2,689,636	304,032	320,884

資料：静岡県商業統計調査（昭和54年6月1日現在）

ることもあって全体的に停滞している。

集落や市街地は海岸に沿って点在していたために中心的商店街はこれまで十分に発達していなかったが、現在下田市、東伊豆町、松崎町には大型店舗が進出しており商業の中心地である下田市が総販売額の52%を占めている。しかし、近年は高級生活用品や耐久消費材などを地域外から購入する消費者が増加しており地場での購買力が弱まっている。

このため、消費者サービスの向上と共に店舗の近代化を図り、地域住民や観光客にとって魅力ある買物が出来るよう積極的に対応して行くことが必要であろう。

の 概 要

(単位：百万円)

年間販売額		1 商店当たり		従業員 1 人当たり 年間販売額	摘 要
51 年	54 年	従 業 者	年間販売額		
百万円 57,236	百万円 53,732	3.2	百万円 42	万円 1,289	
5,617	6,077	2.4	18	749	
6,422	8,502	3.0	28	915	
4,922	7,469	2.9	27	940	
8,432	8,313	3.1	24	768	
10,865	12,932	2.7	25	941	
3,645	3,489	2.9	19	662	
1,542	1,893	1.9	14	740	
98,681	102,407	2.9	30	1,030	
5,489,792	7,145,460	3.7	84	2,227	

4 工 業

本地域の昭和55年12月31日現在における事業所数は313箇所、製造品出荷額は391億5,000万円で昭和50年に対して20箇所(6.8%)、151億5,600万円(63%)の伸びを示したが、従業者数は3,776人から3,706人へと70人(1.9%)減少した。経営規模としては地形等の障害もあって小規模のものが多く、従業者数30人未満の事業所が全体の94%を占め30人以上はわずか19箇所、この内100人以上の事業所は4箇所にすぎない。

次に、生産効率を昭和50年と比べてみると1事業所当たり出荷額は8,189万円から12,508万円へ53%、従業員1人当たりの出荷額は635万円から1,056万円へ66%、それぞれ上昇しているが1事業所当たりの従業者数は12.9人から11.8

第12表 事業

区分	事業所数		従業者規模別			
	50年	55年	1～29人		30人以上	
			50年	55年	50年	55年
市町村						
下田市	72	69	69	67	3	2
南伊豆町	19	18	18	18	1	—
松崎町	34	35	31	32	3	3
河津町	17	13	16	12	1	1
西伊豆町	59	82	54	76	5	6
東伊豆町	37	37	37	37	—	—
天城湯ヶ島町	30	29	27	26	3	3
賀茂村	25	30	22	26	3	4
地域計	293	313	274	294	19	19
県全体	29,542	30,426	27,363	28,155	2,179	2,271

資料：静岡県工業統計調査(12月31日現在)

人へと8.5%減少して、県平均15.9人の7割にとどまっており経営規模が小さい。

製造品出荷額を業種別にみると造船業、食料品、木材加工業などが主力となっており、市町村別では下田市が総出荷額の31%を占めて最も多いが近年は西伊豆町が事業所数、出荷額とも著しい伸びを示している。

限られた立地条件の中にあって、本地域の工業が抱える労働力不足と低い生産性等の問題解決のために近代化を促進して地場産業の育成を更に積極的に推進して行くことが今後の課題であろう。

所 の 概 要

従業者数		製造品出荷額		摘 要
50年	55年	50年	55年	
1,071	966	百万円 10,617	百万円 12,311	従業者100人以上 1ヶ所
163	117	740	1,743	0
406	396	1,211	2,293	0
206	214	1,616	3,068	1
778	874	2,826	7,746	1
192	195	989	863	0
517	383	2,769	5,676	0
443	561	3,226	5,450	1
3,776	3,706	23,994	39,150	4
472,097	484,351	5,247,187	9,531,175	

第13表 産業別・事業所

区 分	下 田 市		南 伊 豆 町		松 崎 町		河 津 町	
	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額
食 料 品	32	1,592	7	159	14	325	6	262
木 材・木製品	10	538	1	x	4	143	3	x
家 具・装備品	2	x	—	—	3	35	—	—
窯 業・土 石	2	x	3	1,413	—	—	3	429
金 属 製 品	6	129	—	—	1	x	1	x
一 般 機 械	—	—	—	—	1	x	—	—
電 気 機 械	—	—	—	—	—	—	—	—
輸 送 機 械	3	6,865	3	102	4	839	—	—
そ の 他	14	3,187	4	69	8	951	—	2,377
計	69	12,311	18	1,743	35	2,293	13	3,068
構成比	22.0	31.4	5.8	4.5	11.2	5.9	4.1	7.8

資料：静岡県工業統計調査（昭和55年12月31日現在）

注）：xは秘匿のためその他に集計金額が記入してある。従って産業

数・製造品出荷額の概要

(単位：百万円)

西伊豆町		東伊豆町		天城湯ヶ島町		賀茂村		地域計	
事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額
36	2,864	18	299	10	510	7	78	130	6,089
6	242	7	194	8	1,007	4	200	43	2,324
1	x	7	184		—	1	x	14	219
2	x	1	x		—	1	x	12	1,842
2	x	1	x	2	x	—	—	13	129
10	281	—	—	1	x	2	x	14	281
4	57	—	—	—	—	3	43	8	100
7	2,440	2	x	—	—	3	4,228	22	14,474
14	1,862	1	186	8	4,159	9	901	57	13,692
82	7,746	37	863	29	5,676	30	5,450	313	39,150
26.2	19.8	11.8	2.2	9.3	14.5	9.6	13.9	100	100

別の合計金額は実数でない。

各論

I 地形分類図

1 地形の概要

下田・神子元島図幅にふくまれる地域は、伊豆半島南部にあたり、伊豆半島北部の口伊豆に対して奥伊豆ともよばれ、山地のしめる面積が広い。図幅の北部と北東部には猫越火山、天城火山など修善寺・伊東・稲取図幅からの延長にあたる火山体が見られるが、南部は長九郎山や蛇石火山をのぞくとほとんどが非火山性山地である。そして伊豆半島の基盤となる第三紀層の湯ヶ島層群や白浜層群とそれらを買入する岩体から構成されている。火山体も湯ヶ島層群などをおおうように噴出物が分布している。登り尾(1056 m)、猿山(999 m)、長九郎山(995 m)、婆婆羅山(608 m)などがおもな山頂である。そして北部から南部にむかって大起伏山地から中起伏、小起伏、丘陵地へと移行している。

山地を流出する河川には、河津川、稲生沢川、青野川、仁科川、那賀川などがあり、いずれも二級河川である。河川の規模はいずれも小さいが、上流部には峡谷や滝を形成して美観をそえ、下流には沖積低地を発達させて平坦地のすくない南伊豆における生産の場を提供している。また中流部にみられる河岸段丘は袋状の堆積地がのちの曲流と下刻によって形成された地形で独特の土地条件である。

河川の特 性

	流域面積 (A) km^2	幹川長 (L) km	平均幅 (A/L)	形状係数 (A/L ²)	流域最高 高度 (H) m	起伏量比 (H)/L
青野川	71.62	17.2	4.16	0.24	545	0.032
稲生沢川	77.65	17.5	4.43	0.25	681	0.039
那賀川	48.25	13.8	3.49	0.25	996	0.072
仁科川	57.89	15.5	3.73	0.24	1,035	0.067
河津川	81.49	17.8	4.58	0.26	1,237	0.069
岩科川	24.96	10.2	2.44	0.24	520	0.050
宇久須川	27.39	7.3	3.75	0.51	920	0.126

山地が海にせまるために、東側の相模灘と西側の駿河湾に面する海岸には海食崖が形成され、岩石海岸特有の海食地形を示している。堂ヶ島・天窓洞・石廊崎の海食崖や海食洞、みの掛島、入間の千畳敷など多様であり、富士箱根伊豆国立公園に指定されている範囲もある。また隆起運動にともなう海岸段丘の発達も局部的に散在し、とくに石廊崎から須崎半島にかけては、隆起海食台に特色がみられる。河口には砂浜や砂礫州の発達もあり、白浜・弓ヶ浜のほか、田牛には砂丘も発達している。海食崖、波食棚、海食洞など海岸の小地形の種類はおおい。また出入のおおい海岸は湾奥に港を発達させ、下田・妻良などは風待港として重要であったが、高潮や津波の害をたびたびうけてきた。

南伊豆はまた災害をおおくうけた。1974年の伊豆半島沖地震、1978年の伊豆大島近海地震、1976年の大雨による崩壊や氾濫の発生などはその最近の事例である。海岸の津波・構造線にそって活断層、山腹斜面の崩壊や山くずれ、土石流、洪水、浸水……その多様な災害をもとに調査と防災対策がすすめられた。図示されないが1981年に完成した河津七滝ループ橋は復旧と防災をかねて建設された国道の一部で名所にもなっている。地かく運動の激しい地域であるだけに、開発や整備にあたってはその土地条件の吟味の上に措置されるべき点がおおい。

南伊豆山地には山頂平坦面の分布が広いが、それと山腹斜面との間の傾斜変換部をもとに山くずれが発生し、旧地すべりによって滑落崖の発生した例もみられる。また大規模な土石流のあとを堆積物から推定することもできる。現在も松崎町門野は地すべりの防止地区に指定されており、落居・伊浜など海岸ぞいにも崩壊の危険地がおおい。1961年に下田まで開通した伊豆急行は南伊豆を従来の農山漁村から観光地へと変貌させる契機ともなった。そして人工改変が急激に進行したが、それらにともなう治山・治水・防災的諸問題に関してはさらに慎重さを要求される地域といえる。

2 地形区

本図葉の地形区については、海拔高度・起伏量・谷密度・傾斜分布・地形面の特性・構成物質・地域的まとまりなどを基準にして、次のような区分をおこなった。

地形区分表

I 山地	I a 宇久須山地	
	I b 仁科川流域山地	
	I c 松崎山地	
	I d 雲見山地	
	I e 南伊豆山地	
	I f 稻生沢川流域山地	
	I g 河津川流域山地	
	I h 白浜山地・丘陵地	
II 火山地	II a 天城火山地	
	II b 猫越火山地	
	II c 長久郎火山地	
	II d 蛇石火山地	
III 低地・台地	III a 海岸小低地群	III a 1 仁科川下流低地
		III a 2 那賀川下流低地
		III a 3 青野川下流低地
		III a 4 稻生沢川下流低地
		III a 5 河津川下流低地
	III b 山間低・台地	III b 1 青野川中流低・台地
III b 2 稻生沢川中流低・台地		
III b 3 河津川中流低・台地		
III c 須崎台地		

3 地形分類

I 山地

下田・神子元島図幅の山地については、とくに明瞭な分類基準に乏しいが、起伏量・流域単位・独立性・連続性などをもとに8地区に区分した。

宇久須山地 (I a)

宇久須川の流域にぞくする山地で、修善寺図幅からの延長である範囲を宇久須山地 (I a) とした。大野山 (615 m) から笠蓋山 (698 m) へとつづく稜線

を境界にして、その西側は白浜層群の白色凝灰岩類・石英安山岩類からなり、開折をうけて、谷密度の高い山地となっている。海岸線の出入りも大きく、安良里港・田子港などの湾入部をもって駿河湾に面している。外海に面する岬端部はいずれも波食をうけて海食崖となっている。稜線の東側は湯ヶ島層群の安山岩類の火山碎屑岩からなる地域で、岩脈状に貫入岩体が分布し、突出部を形成しているが、その周辺は変質帯となっている。起伏量も大きく大起伏山地ともなるが600 mほどの定高性をもつ稜線上には、山頂平坦面が分布し、八ノ段などはその事例である。

仁科川流域山地 (Ib)

仁科川流域から那賀川右岸にかけての山地で、中～大起伏山地であり、ひとつの単位として仁科川流域山地 (Ib) とした。伊豆の基盤である白浜層群や湯ヶ島層群からなる山地で、地質図によると岩相の変化や断層がいり乱れ、構造的にいちじるしく複雑である。西側は宇久須山地からの延長の白色凝灰岩や石英安山岩類などからなる山地で開折もすすんでいる。海岸にそって海食崖・海食洞・島岬など変化のはげしい地形でもあり、堂ヶ島・三四郎島など、海岸地形の特色を示す。仁科川の流路は直線的で峡谷をつくるが、一色と称宜畑の間は山地がせまり、白川玄武岩類とよばれる地層と直交しながら曲流している。大城・富貴野・八重名野・門野・野畑などに山腹緩斜面がみられるが、崖錐性堆積物が表面をおおい、かつての大規模地すべりや大規模崩壊に由来する形成過程も想像される。門野は現在も地すべりがつづいていて、防止地域の指定地となっているが、門野のほか富貴野・野畑にも活断層がとおっており構造的な破碎帯とも考えられる。

松崎山地 (Ic)

仁科川と那賀川とはさまれる松崎町の山で、大鍋越から婆娑羅峠にいたる稜線が東斜面との境界をなして、その範囲を松崎山地 (Ic) とした。海拔高度も500 m以下の中起伏山地であり、白浜層群と湯ヶ島層群からなる山地である。分水界の稜線も400～500 mの定高性を示し、平坦面もみられるが、河川の下刻もいちじるしく、流路ぞいの谷壁は急傾斜となり、峡谷状の谷となる。また山頂の平坦面と山腹斜面の間は傾斜の変換部にあたり、山くずれや崩壊の発生がおおく、大鍋越あたりの崩壊発生はおおい。地形的要因とともに降水量との関係、植生の状況、風化による表層の岩屑の発達などの土地条件も考え

られる。

雲見山地 (I d)

那賀川河口から南部一帯にひろがる蛇石火山西方の山地を雲見山地 (I d) とした。構成岩石は白浜層群の凝灰岩質砂岩・シルト岩・角礫岩などが東側に分布するが、西側は石英安山岩の岩脈の貫入岩体が広い面積をしめていて変質岩となっている。松崎から雲見・波勝崎をへて伊浜まではこの山地が海に面して海食による急崖をなしており、波勝崎北方には落差 200 m をこえる赤壁とよばれる崖がぎりたっている。また雲見の烏帽子岳・千貫門など観光地ともなっており、岩石海岸の特色をもっている。凝灰岩質からなる部分は開析がすすみ、水系はこまかくなるが全体的に貫入岩体からなる山地である。

南伊豆山地 (I e)

南伊豆南端部の青野川・大賀茂川流域の山地を一括して南伊豆山地 (I e) とした。高度も 500 m 以下の中～小起伏山地が広いが、大賀茂川河口から石廊崎までの海岸ぞいには起伏量や高度、地形的特性をもとにし、丘陵として分類してある。構成岩石は白浜層群にぞくする石英安山岩質の火砕岩類の分布が広く、これらを貫入する岩体もあり岩相変化はいちぢるしい。北西—南東方向、北東—南西方面に直交する断層系や構造線に支配された水系や山系がはしり、山地はブロック化している。断層や割れ目がおおいので、表層や深層の風化もすすみ、崩壊現象の発生しやすい素質をもつ。青野川左岸の山地は 400 ~ 300 m の稜線をもち、水系の発達も進行して谷密度は大きい。また水系のひだはこまかく丘陵性の地形であり、谷壁斜面の勾配は局地的に大きくなる。右岸の山地は 300 m 以下と高度は低下するし、定高性の稜線には平坦面もみられる。山地は海岸にせまって海食崖を形成するが西海岸にくらべると顕著ではない。石廊崎より西は中木・入間・吉田・妻良・子浦など小河川の河口の堆積地が湾奥部に形成され、浜もみられ、港となっている。中木東方には南崎火山とよばれる溶岩流地が南北約 500 m にわたってみられ、海食台地上に噴出した小火山で、溶岩流とスコリア丘からなり池の原溶岩丘ともよばれる。

稻生沢川流域山地 (I f)

稻生沢川流域をひとつの単位とし、周辺山地と地形的に特別な差異は認められないが、稻生沢川流域山地 (I f) とした。構成岩石は白浜層群上部を構成する輝石安山岩類の分布が広く角礫岩・凝灰岩からなる。これは神子元島図幅の

地質図では須崎安山岩類にあたり、変質をうけていることもおおい。また下流部には湯ヶ島層群の分布もみられ、岩相変化は複雑であり流紋岩類のしめる地域もある。活断層図によると顕著な活断層の分布はみられないが、東西方向に平行するリニアメントの指摘があり、南北方向の地質構造の傾向とともに水系と山系の配列がきまり、方向性に特色をもつ山地ともいえる。中～小起伏山地で400～500 mの高度に平坦面をもつ。坂戸・大沢など山間の緩斜面は構造的な要因もふくめて旧地すべりや旧大規模崩壊による堆積地でもあり、坂戸は白浜層群の変質帯にあたっている。

河津川流域山地 (I g)

河津川流域山地のうち左岸の天城火山地区をのぞき、右岸の山地を河津川流域山地 (I g) とした。上流山地は湯ヶ島層群の安山岩質凝灰岩・凝灰岩質砂岩などからなる山地で、石英安山岩類の貫入岩体もみられる。貫入岩体の周辺は変質をうけているし、岩相変化はいちぢるしく複雑で地質図上の断層もおおいが、地質と地形との対応は明瞭ではない。河津川の流路はほぼ構造線に支えられた直線的な流路をとっているが、東西方向のリニアメントも発達し、他地域と同様に水系と山系の方向性を示している。定高性の稜線がのびて緩斜面を尾根にそって残すが、山腹斜面との間の傾斜変換にもとづく崩壊をおこしやすく、災害のあとはおおく残っている。河川の下刻もはげしく谷底低地はほとんど発達していない。

白浜山地丘陵地 (I h)

稻生沢川下流左岸にある高根山 (343 m) を中心にのびる南北方向の稜線の東側一帯の山地を白浜山地丘陵地 (I h) として区分した。この地域は湯ヶ島層群とともに白浜層群の凝灰岩質砂岩類・凝灰岩・角礫岩などからなる山地で、岩石の変質帯もみられ、地形的には小起伏山地・丘陵性の山地である。河川の開析によりひだのこまかい山と谷の斜面が交錯し、稜線部は山地であるが東斜面は台地を刻む丘陵の景観をもっている。緩斜面や尾根は畑地や樹園地に改変され、農業的土地利用はすすんでいる。相模灘に面する白浜には広い砂浜海岸と付着する砂丘が発達するがこれは白浜層群の山地から運搬された物質に由来するといえる。縄地・坂戸・長田・原田などには海岸段丘の台地も点在し、丘陵と台地を刻む谷壁斜面の急峻な所の崩壊もみられる。万蔵山山頂一帯の平坦面は海岸段丘を区分した場合の高位平坦面となっており砂礫質は乏しいが段丘

面（砂礫台地）として分類した。

II 火山地

天城火山地（IIa）

天城火山は標高 1,406 m の万三郎岳を主峰とする火山体であり、本図幅にはその南西部の斜面がふくまれ、標高約 1,100 m ほどから河津川にむかって高度を低下させる部分にあたり、天城火山地（IIa）として区分した。河津川流路の左岸がそれにあたる。更新世に活動した火山であり、ほとんど安山岩質溶岩流からなるが、古期溶岩と新期溶岩に区分される。しかし山体は開折されているために谷筋や周辺部には基盤岩石である湯ヶ島層群が露出している。また南部には玄武岩類からなる溶岩流地や岩滓丘があり、谷を埋積している。三筋山（811 m）登り尾（1,056 m）は古期溶岩流からなる山で、登り尾での溶岩のあつさは約 400 m をもち、山腹斜面は急峻で崩壊もおおい。三筋山は古期の外輪山の一部にあたり、約 300 m のあつさの溶岩をもつが、北東側は白田川により開折されている。登り尾東北方の緩斜面や平坦面は新期溶岩からなる地域で天城火山の本体である。天城火山周辺に分布する玄武岩質の岩滓丘や溶岩流の流出は大室山火山群の活動とほぼ前後して噴出したと考えられるが、代表的な例は円錐形の鉢山（519 m）である。比高 250 m、直径 1.5 km をもち、その西麓と南麓とからは玄武岩質溶岩を流出させ、奥原川や佐野川の谷をうめて河津川河谷低地に達する溶岩流低地を形成している。また鉢山の北北西 2 km の所にある小噴石丘、南東の大池・小池付近など 5 か所の噴石丘があり、凹地は噴火口と考えられている。また河津川ぞいの河津七滝をつくった溶岩流を流出している。天城火山は中心から天城峠方面、登り尾方面、鉢山方面、三筋山方面へと尾根が放射状に派生しているが、その間をほぼ放射状に谷が発達して解体をすすめている。そして平坦面、谷壁斜面、谷底低地とその傾斜の変換がいちぢるしい。溶岩流、崩落物質などによる堆積地なども緩斜面の形成にあずかっており、山くずれもおおく、山地の侵食に対する崩壊の役割も大きい。

猫越火山地（IIb）

鮮新世の活動と考えられる猫越火山の噴出物は安山岩類を主とするが、その分布は修善寺図幅からの延長として図幅の北部にみられるので、その地域を猫越火山地（IIb）とした。猿山から南にのびる稜線にそって安山岩類の分布がみられ、湯ヶ島層群を基盤としている。溶岩流は約 400 m のあつさをもつが、猿

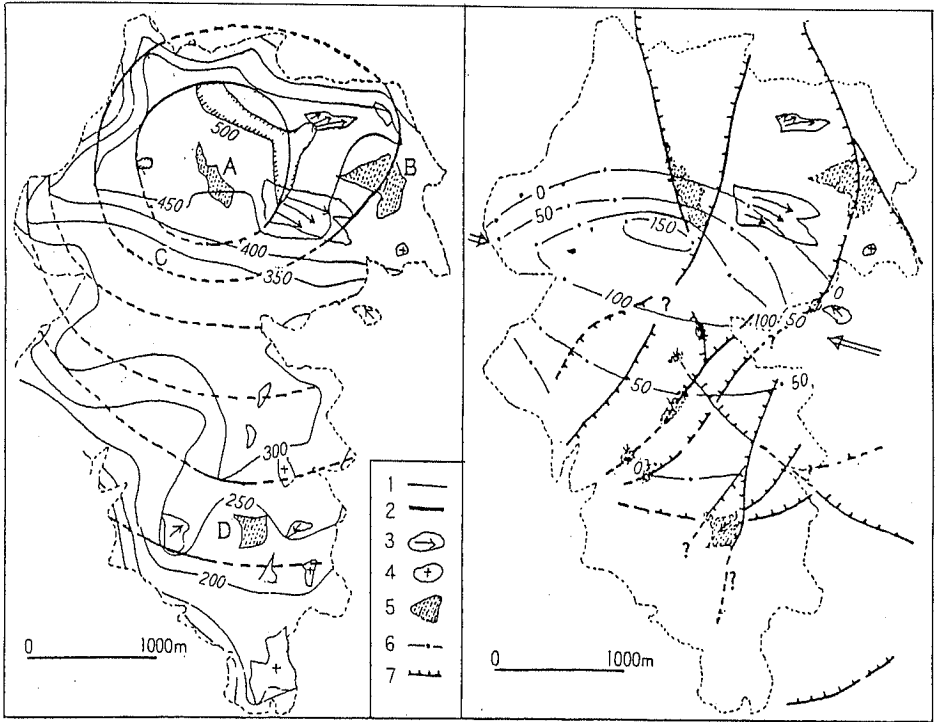
山安山岩ともよばれ、山頂付近は平坦な地形であるが、周辺は崩壊地もおおい。

長九郎山火山地(Ⅱc)

仁科川流域山地と河津川流域山地との間に位置する火山岩からなる地域を長九郎山(995 m)の名をとって長九郎火山地(Ⅱc)とした。地質図によると長九郎山の頂上部は湯ヶ島層群の硅化岩からなるが、その東西に安山岩類が約160 mのあつきで流出しており、溶岩流は山頂付近から南にのび、那賀川支流の池代川にむかっている。活動の時期は鮮新世後期と考えられる。とくに独立した山体としての火山ではなく、火山岩の分布という性質での区分であるため周囲の山地とは地形的に区別しにくい。しかし安山岩溶岩流の分布地域は緩斜面をもち周辺の侵食のすすんだ山地とは対照的である。長九郎山から猿山にかけて一帯は広範囲にわたって旧火山の変質帯の表示が地質図には示されており、風化作用をもとに侵食をおこしやすい不安定な土地条件であることをあらわしている。

蛇石火山地(Ⅱd)

伊豆半島西南部に位置する更新世に活動し安山岩溶岩を流出させた火山を蛇石火山地(Ⅱd)として区分した。地形的には緩斜面の集合であり、それを放射状に浅い谷が開析している。平坦地の周辺の傾斜変換部は大規模崩壊や旧地すべり地形もみられ、谷にそう土石流的堆積物が岩科川方面や石部海岸にむかっており、蛇石にむかう谷筋にも崩壊性の地形がみられる。蛇石火山は標高約500 mほどの高度をもち、長者原・天神原などの平坦地、大池・一町田などの窪地に特色があり、窪地は沖積層で埋積されて平坦地となっているが、火山の噴火口や爆裂火口のあとと考えられ5個の窪地が火口とされてきた。火山噴出物は約200 mのあつきをもつ安山岩質溶岩流からなり、火山碎屑物をふくまない低平な溶岩台地ともいえる。噴出時代は更新世の中期とも鮮新世ともいわれ確定的ではない。金子(1977)によると原面の復原にもとづいて、半月形にはしる等高線にかこまれる長者原の窪地を火口と考えている。そして水系も長者原を中心に放射状にのびている。また山稜上のくいちがひ、連続する崖、閉じられた窪地、切断された水系の不連続性、火山原面の配置などをもとに断層系が図示されている。それによると長者原をとる北北西系の長者原断層は数十メートルの東おち、北北東系の大峠断層は数十メートルの西おちの落差をもち



蛇石火山の復原と活断層系 1, 等高線 2, 復原した蛇石火山 3, 火山原斜面の傾斜方向 4 同, 水平のもの 5, 窪地 6, 火山原斜面と切斜面の高度差 7, 活断層 (金子史郎(1977)による)

火口と考えられる窪地も断裂による落下が原因で生じたものと推定している。

III 低地・台地

海岸小低地群 (IIIa)

伊豆半島南部は山地のしめる範囲が広く、低地や台地の分布はごく限られている。それは山地が海にせまり、大河川の発達がなく、運搬物質を堆積する浅海や沿岸にめぐまれないことによる。しかし中小河川ぞいには河谷低地や河口の沖積低地が形成され、集落が立地し、農業生産活動の場となっている。

仁科川下流低地 (IIIa1) : 仁科川は中流域に峡谷を形成し、一色から下流には平坦な河谷低地を形成し、松崎港北東の河口付近には沖積低地を発達させている。海岸ぞいの大浜の砂浜、浜堤状の砂礫州により、その内側は低湿地性であったが、埋積により平野となった。河川は改修がすすみ、南の山ぞいを流下している。山麓と平野部との境界は明瞭で、沈降性の平野であるが、支谷の出

口にあたる崖錐状の微高地や自然堤防上、浜堤上などが集落や市街地の位置となる。中のあたりを境にして上流は砂質、下流は泥質地盤に区分される。地形区分図には図示されないが、上流の宮ヶ原はポケット状の堆積地を形成し泥砂礫質からなり、流路の変遷にもなる段丘地形も発達している。

那賀川下流低地(Ⅲa2)：那賀川は河口付近で岩科川を合流するため、那賀川と岩科川との両河川ぞいの沖積低地をまとめて、ひとつの単位とした。南郷岩科のあたりからは低平な泥質地盤となり水田がひろがるが、河口付近の市街地は被覆された砂礫州地盤上になっている。海岸は浜が発達し、防潮堤も構築されている。支谷の出口は砂礫質の地盤からなる小扇状地性の堆積地で、江奈はそのような地形上に立地している。岩科の上流側の八木山にかけて、また峰輪・大沢付近には断片的に段丘がみられ礫層がのっている。仁科川と同様に浜堤によって河口が閉塞されたために、内側は低湿性であり、河口も南端に移行しているし、泥質堆積物からなる地域は内陸まではいりこんでいる。

青野川下流低地(Ⅲa3)：青野川下流低地はほぼ下賀茂のあたりまでさかのぼる。河川はきわめてゆるやかな流れをもち、河口から約3.5 kmまで潮汐の影響をうけるといわれる。河口には弓ヶ浜とよばれる広い砂浜が発達し、浜堤も5 mをこえる。被覆された集落の立地する旧浜堤は2列にわたり、後背湿地がその間に堤間湿地として東西にのびている。この浜堤に閉塞された沖積低地は泥質からなり下賀茂までその地盤をもつ。沈降性の平野で沖積地は支谷にも樹枝状にはいりこみ、大賀茂川ぞいの低地もそのような特色をもつ。河川は曲流をくりかえす流路をもっていたが、1976年の水害以降、改修がすすみ、短絡化築堤、河幅拡大などがすすめられた。

稻生沢川下流低地(Ⅲa4)：下田港に流出する稻生沢川下流の低地で泥質地盤からなり、河口付近は市街地化がすすみ、砂州の存在は不明であるが人工的埋め立て面積も広い。低平な低地であり、海拔5 mの地点は河口から3.5 kmも上流に及んでいる。河川勾配はゆるく、地盤も軟弱なシルト・泥層からなるが、山ぞいには砂泥質地盤もみられる。東西の山間の地をうめたてた形態をもち、津波の害をおおくうけてきたが、1854年の安政地震の際には下田で5.7 m、柿崎で6.7 mの波高が復元されている。

河津川下流低地(Ⅲa5)：河津川の下流部でも筏場のあたりから沖積低地をひろげて河口に達するが、砂泥質地盤が広く、他河川と同様に河口の砂礫洲の

高まりで閉じられた内側は低湿地性となっている。河川勾配は他の河川にくらべて若干大きくなっており、現河床に砂礫の分布することから、運搬物質の面でも他の河川とはことなり、自然堤防状に堆砂地もみられる。なお河川の下流右岸部には火山砕屑物及び泥流堆積物からなる台地・丘陵性の地形がみられる。分類図では溶岩流低地としたが、稲取泥流の堆積地で標高 140 m 程度の平坦地を構成するが開析もすすみ、山地に移行する。この泥流の発生した時はC⁴の年代測定により、24950±1250 年以前という年代が与えられている。

山間低台地 (Ⅲb)

青野川、稻生沢川、河津川などの上中流部には断片的にはあるが袋状の堆積地が峡谷部や曲流部をはさんで形成され、のちの下刻や流路の変遷にもなって段化され、小規模の段丘となった地形が散見される。分布範囲は限定され局地的な変化が大きいために段丘の段化、対比、段丘堆積物の特色などを詳細に記載することはできないが、各河川についてその状況を記しておく。

青野川中流低台地 (Ⅲb1) : 青野川中流の市之瀬—川合野、上賀茂—下賀茂、支流の二条川ぞいに断片的に河岸段丘が分布する。砂礫質の堆積物の由来や段化は困難であるが、堆積物は上流部からと同時に周辺の山地から崖錐状に供給された物質のおおいことが考えられる。したがって他の河川の場合でもいえるが、段丘面の形成には崖錐性堆積物による面の発達を考える必要がある。川合野付近は川幅・堆積地も広く水田化されているが、流路の変遷が崖をつくりながら段化した経緯が考えられる。

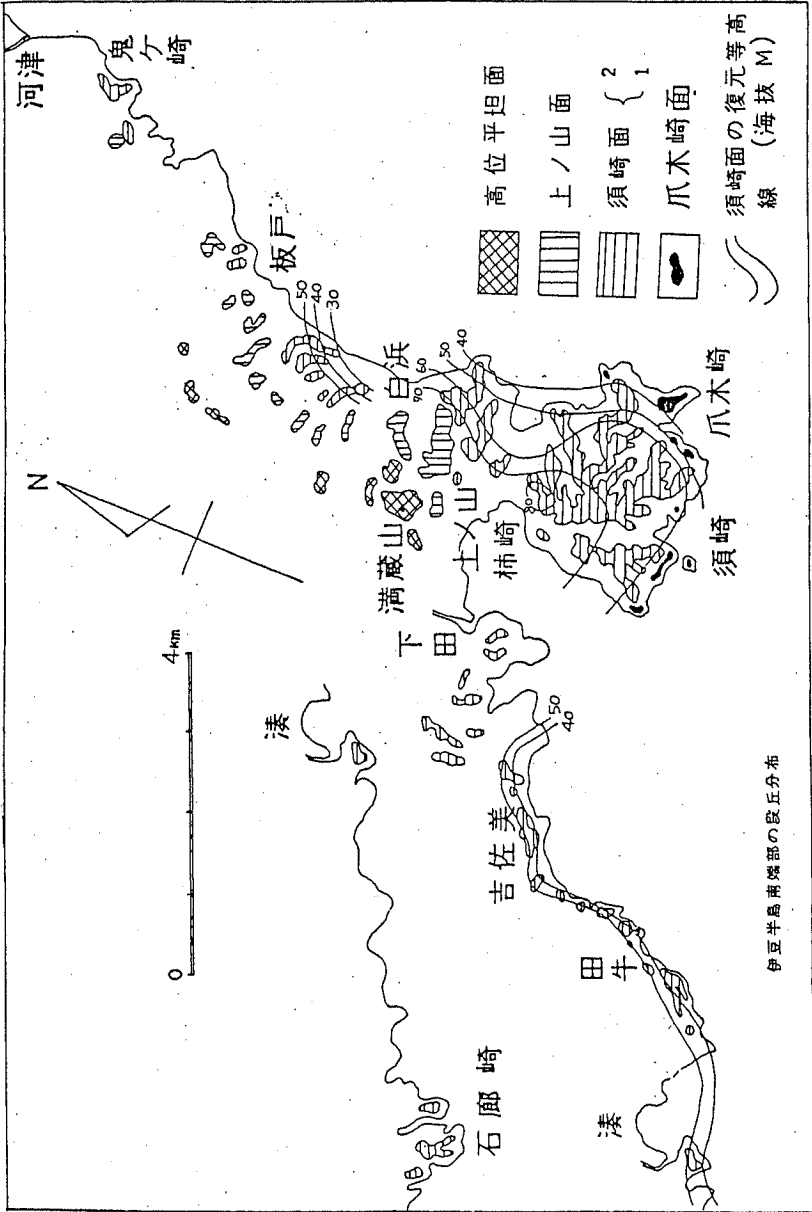
稻生沢川中流低台地 (Ⅲb2) : 稻生沢川は落合で直角状に流路をかえ南流するが、この狭窄部をさかいに上流側に広い堆積地が発達する。とくに本流と須郷川との合流付近には河床面より上位に数段の段丘と山麓に付着する崖錐の平坦面をみることができ、段丘堆積物の礫層の露頭もある。河川は沖積低地からやや崖をつくって下刻した流路を現在もとっているが、沈降性の海岸ぞいに対して隆起性の内陸の特色の表現かもしれない。広い段丘面は 2 段にまとめられるが、水田耕作の進展は原形をかなり変形しているといえる。

河津川中流低台地 (Ⅲb3) : 河津川中流部の湯ヶ野から梨本にかけても小規模の断片的な段丘に特色がある。この地域は溶岩流の流出にもなる谷ぞいの平坦な地形の形成も関連するが、同時に河川勾配も大きく、下刻にもなる段丘地形の経緯も想定される。大鍋川との合流点にみられる平坦面は山腹斜面の

ようにも感じられるが、礫層の露頭もある。梨本から七滝にかけては山がせま
り幅もせまくなるが、下刻の著しい所で峡谷状の流路となり、比高が大きくなる。
筏場付近の段丘も原形は溶岩流による平坦面の形成とも考えられるが
段丘崖をとまなう砂礫台面としてあつかった。小鍋川との合流付近も崖錐堆積
物による平坦面と下刻による台地化とが合体した特色をもつ。河津川をうめた
溶岩流をさらに開析した河川の谷壁は侵食による段丘崖といえるが、この部分
は急斜面で崩壊が発生しやすく、1978年の地震の際にはこの遷急線にそう落石
型の崩壊が顕著であった。

須崎台地 (Ⅲc)

下田湾東方を南にのびている須崎半島は、半島の基部から段丘面の分布が広
く、海岸段丘、隆起海食台と考えられる。半島部を一括して須崎台地(Ⅲc)と
した。伊豆半島の海岸には、海抜10m以下、20~40m、50~60m、70~80m、
90~120mの5段の海岸段丘が一般に認められ、これらの旧汀線高度は、いず
れも伊豆半島の南東海岸から北西にむかってひくくなることが報告されている(吉川
虎雄他 1973)。とくに須崎半島については、尾原信彦(1937)の報告があり、
池の段、須崎半島の平坦面、上ノ山高位段丘、高蔵山平頂峰の4段に区分して
いる。そして須崎半島の平坦面は50~70mで分布も広い。また坂本享ら(1975)
は爪木崎面: ±20m、須崎面Ⅰ: 40~50m、須崎面Ⅱ: 60~80m、上ノ山面:
100m±、に区分しており、須崎面の形成時代については、侵食状況や赤色風
化土の存在から、多摩面、東海地方の高位段丘面に対比させている。爪木崎付
近では段丘堆積物の礫層が観察され、須崎半島を遠望すると台地地形は明瞭で
ある。台地面は畑地になっており、侵食谷との傾斜の変換は急であり、半島全
体が海岸段丘崖・海食崖でかこまれるが、丘陵性の様相も呈する。平坦面上に
は段丘礫層は乏しく、基盤が露出する場合、表層土壌からなる場合など地域差
は大きい。半島の周辺には島崎や岩礁も発達しており漁場となり、爪木崎・恵
比寿島など観光地にもなっている。



(1974年伊豆半島沖地震に関する特別研究報告書(1975)より)

4 起伏量図

起伏量図は国土地理院発行、縮尺5万分の1地形図の各辺を20等分してえられる各方眼内の、最高点と最低点との標高差を下記の階級区分によって図示したものである。各階級の分布とひろがりをもとにして、山地や火山地、山麓などの地形分類および地形区分図の作成の基準とした。

0 : 50 *m*未満

1 : 50 ~ 100 *m*

2 : 100 ~ 150 *m*

3 : 150 ~ 200 *m*

4 : 200 ~ 300 *m*

5 : 300 ~ 400 *m*

6 : 400 ~ 500 *m*

7 : 500 *m*~

起 伏 量 图

```

    4 6 5 6 5 5 6 5 5 7 5 4 5 6 5 5 5 6 5
4 4 4 5 5 6 5 5 5 6 6 6 5 5 6 5 4 6 5 6
5 4 5 6 6 6 5 6 5 5 5 6 6 5 4 7 6 4 5 5
1 3 4 5 5 5 4 5 6 5 5 5 5 5 5 5 5 4 4 2
1 4 5 5 5 6 5 5 5 6 5 5 6 5 4 5 3 4 4 5
1 5 5 5 4 6 5 6 6 6 5 6 5 5 5 4 5 5 4 5
    3 3 4 6 5 5 5 4 4 5 5 5 4 5 5 5 4 5 5
    1 2 4 5 5 5 5 4 5 5 4 5 6 6 5 4 4 6 5
    1 4 4 4 3 5 6 6 6 5 4 6 6 5 3 4 5 4 4
        2 2 2 4 3 5 6 5 5 4 5 4 3 3 4 3 2 3
1 4 4 3 3 6 6 4 5 4 5 5 5 5 4 3 5 5 4 2
1 4 4 4 4 4 5 4 6 5 4 5 4 5 4 5 4 5 4 5
4 5 4 3 4 3 5 5 6 6 4 4 4 4 4 5 4 4 4 5
3 4 5 4 4 4 4 4 4 4 3 4 4 5 3 2 3 4 4 4 2
4 5 6 4 4 4 5 4 4 5 4 4 4 3 3 4 4 4 4 4 4
5 5 4 3 2 4 5 4 4 4 4 4 4 5 4 3 5 2 3
5 5 3 2 4 4 5 4 4 5 4 4 4 4 4 4 4 4 3 0
4 4 4 2 4 4 4 4 5 4 5 4 4 4 4 4 4 4 2 0
    4 4 3 4 4 3 5 5 4 3 4 4 4 4 3 3 2 1
    1 3 3 4 4 4 4 2 2 3 3 2 2 4 2 3 1 1
    2 4 4 3 2 2 2 4 3 2 4 2 2 2 1 1 1 0
    3 3 3 3 2 2 2 3 3 3 3 2 1 1 1 1 1 0
    5 4 3 4 2 2 2 3 3 3 2 2
    4 4 3 3 4 4 3 3 3 2 3 1
        4 4 3 4 3 3 4 3 1 2 0
            4 4 4 4 3 4 2 1 1
                3 4 4 4 1
                    3 2 1
                        1

```

5 道路と河川

- <国 道> 414号線 135号線 136号線
 <主要地方道> 湯ヶ野谷津線 下田松崎線
 下田石廊松崎線 伊東西伊豆線
 <有料道路> 南伊豆有料道路 天城有料道路

河 川（静岡県河川便覧による）

水系名	支 川 名		河 川 延長 (m)	流 域 面 積 (km ²)		
	第 1 次	第 2 次		支川流域	自己流域	計
大賀茂川			4,550		9.99	9.99
稲生沢川			15,100	33.16	43.83	76.99
	平 滑 川		760		1.30	1.30
	敷 根 川		790		1.23	1.23
	蓮台寺川		1,350		7.35	7.35
	稲 梓 川		5,000	9.11	14.17	23.28
		須 郷 川	2,000		9.11	9.11
河 津 川			9,500	15.61	64.28	79.89
	大 鍋 川		4,100		12.06	12.06
	河 津 谷 津 川		2,780		3.55	3.55
安良里浜川			800		3.98	3.98
仁 科 川			10,950	27.70	30.69	58.39
	白 川		1,600		15.91	15.91
	本 谷 川		1,800		11.79	11.79
那 賀 川			10,550	39.80	32.39	72.19
	岩 科 川		6,350		25.09	25.09
	船 田 川		1,000		5.15	5.15
	明 伏 川		3,100		9.56	9.56

水系名	支川名		河川 延長 (m)	流域面積 (ha)		
	第1次	第2次		支川流域	自己流域	計
中木川			800		3.12	3.12
青野川			17,200	40.75	31.59	72.34
	前田川		430		0.77	0.77
	鯉名川		1,900		6.68	6.68
	二条川		4,800	5.58	9.30	14.88
		差田川	1,900		5.58	5.58
	一条川		3,000		9.46	9.46
	奥山川		1,900		8.96	8.96
五十鈴川			585		2.77	2.77
殿田川			500		1.15	1.15

上表の河川流域のほか、一級河川狩野川、二級河川宇久須川水系大久須川、白田川水系などの流域の一部が図幅内にはふくまれている。

<文献・参考引用資料>

尾原信彦（1937）伊豆半島下田付近の海食段丘地形と隆起汀線

地理学評論 13 卷 3～4 号

金子史郎（1977）南伊豆の蛇石火山 地理 22 卷 11 号

科学技術庁（1975）1974 年伊豆半島沖地震に関する特別研究報告書

国土地理院（1975）1974 年伊豆半島沖地震災害状況・土地条件図

国土地理院（1978）1978 年伊豆大島近海地震災害状況・土地条件図

鮫島輝彦ほか（1954）南伊豆蛇石火山（英文）

静岡大学文理学部研究報告 自然科学 5

静岡県（1974）静岡県地質図（20 万分の 1）及び説明書

静岡県（1974）静岡県地震対策基礎調査報告書－伊豆地域－

静岡県出版文化会（1978）静岡の地学 静岡教育出版社

静岡県（1980）静岡県地震対策地質条件図 I（伊豆半島）

地質調査所（1958）5 万分の 1 地質図“神子元島”及説明書

地質調査所（1970）5 万分の 1 地質図“下田”及説明書（地域地質研究報告）

地質調査所（1978）伊豆半島活断層図

土隆一ほか（1975）1974 年伊豆半島沖地震災害調査研究報告

土隆一ほか（1977）1976 年 7 月 11 日大雨による伊豆半島南部の災害調査研究報告

星野通平ほか編（1972）伊豆半島 東海大学出版会

Ⅱ 表層地質図

総論

本図葉は伊豆半島南半部にあたる。伊豆半島、特にその南部は大部分が山地で占められ、本図葉北縁にもっとも高い、海拔 1,000 m 前後の天城山系があり、以南は数 100 m 前後の山稜がひろがる。沖積平野は河谷沿いに狭い谷底平野をつくるにすぎない。

本区域の地質は、基盤として、第三系下部の湯ヶ島層群が主として北部に、第三系上部の白浜層群が主として南部に分布し、それらを天城火山、長九郎火山、蛇石火山など更新世の火山体がおおっている。新第三系も火山岩類や火山碎屑物を多量に含む。また、新第三系、特に湯ヶ島層群は熱水変質作用や温泉作用を蒙り、粘土化してもろくなっている部分もある。

1 未固結堆積物（沖積平野をつくる地層）

沖積平野は河谷沿いに谷底平野として狭く分布する。その堆積物は上流部はほとんど砂礫層から成るが、下田、松崎のように主な河川の河口近くでは厚い泥層や泥砂礫互層となっているところが多い。沖積層の地質は表層 5 m までに卓越する地層で彩色してあるが、詳しくは代表的な柱状図を示してある。

2 未固結堆積物（崖錐および埋立地）

過去の大規模な山崩れのあとの可能性もある崖錐堆積物として観音山と宮が原付近など顕著なものを示した。何れも背後の山地をつくる岩石に由来する礫層を主とする。

埋立地は東海岸の板戸付近と下田港の 2 つを示した。

このほか、未固結または半固結堆積物に相当するものとして火山噴石丘と段丘堆積物があるが、前者は火山岩類の項で述べる。後者のうち、河岸段丘は河津川、稲生沢川など主な河川沿いに見られるが、何れも薄い礫層から成り、海岸段丘は須崎半島とその周辺にやや顕著に発達するが、堆積物はほとんど見られないので彩色を省略した。

3 火山岩類（未固結及び固結岩類）

天城火山には本体の安山岩溶岩、稲取泥流、寄生火山玄武岩溶岩及び未固結の玄武岩岩滓がスコリア噴石丘をつくっている。稲取泥流は安山岩角礫を主とし、砂・粘土を混えるが、炭化木片の C¹⁴年代は 24950 ± 1250 とされている。

このほか、更新世火山体として、何れも安山岩類から成る長九郎火山、蛇石火山および南崎火山、それに鮮新世火山岩類として猫越石英安山岩類がある。

4 固結堆積物

新第三系の白浜層群と湯ヶ島層群がこれに相当するが、両者の層序関係は確実に見られるところは少ないものの、後者の上位に前者が不整合におおっていると考えられる。地質年代については、湯ヶ島層群は初期中新世、白浜層群は中期中新世から鮮新世にわたるものである。

湯ヶ島層群は海底火山噴出物を主とし、凝灰質砂岩、凝灰角礫岩、安山岩などから成るが、大部分は熱水変質作用を強く受けて緑色凝灰岩や変朽安山岩になっているところが多い。典型的な岩相は、本図葉では河津川と仁科川沿岸によく露出する。

白浜層群と海底火山噴出物を主とし、凝灰質砂岩、凝灰岩、凝灰角礫岩、玄武岩から流紋岩に至る火山岩類から成るが、湯ヶ島層群に比較して変質の程度はきわめて小さい。しかし、ところにより顕著に変質作用を受けているところもある。

両層群とも地質構造はゆるやかに傾き、著しいしゅう曲は見られない。しかし、断裂構造の発達は著しく地塊をなしているものと考えられ、火山岩類の顕著なことと相俟って、岩相の横の変化が著しく、地質を複雑にしている。

5 崩壊地・活断層など

1974年伊豆半島沖地震及び1978年伊豆大島近海地震による崩壊地、ならびにおそらく大雨などによると思われる過去の崩壊地を図示した。これを見ると断層沿いや特定の地域に集中していることがわかる。熱水変質作用を著しく受けた区域は粘土化がすすみ、岩石がもろくなっている場合が多いのでこれも図示した。断層については確認された地震断層、活断層、推定活断層を特記した。

Ⅲ 土 壤 図

1 岩 石 地

土壌層がなく、基岩が露出している。本図では碎石跡地などに分布する。

2 残積性未熟土壌

多少にかかわらず侵食の影響がみられる(A)・Cまたは(A)・BC・C断面を持つ土壌である。これに層する土壌統は野畑統で堂ヶ島周辺の凝灰岩地域の山地斜面に分布している。暗～黒褐色の礫質土層を特徴とし、主に普通畑に利用されている。

3 砂丘未熟土壌

排水良好な海岸砂丘地に分布し、土性は粒径のそろった細粒質の砂丘で、(A)・C断面を持つ未熟な土壌である。これに属する土壌統のうち、弓ヶ浜統は、稀に内湾性の貝化石を含む細粒質の砂層を母材とし、わずかに腐植を含むAp層をもつ土壌で、南伊豆町弓ヶ浜および下田市大浜の砂洲上に分布している。

林野土壌では雲見1統、白浜1統である。このうち、雲見1統は腐植の滲潤によって形成された褐色の(A)層が10cm内外に発達した土壌で、雲見海岸周辺と安良里港の砂嘴地帯に分布し、主として天然の混交林を形成している。白浜1統は腐植の滲潤によって黒～黒褐色のA層がみられるが、その層厚はごく浅く、その下部に灰褐色を帯びたC₁層がみられる土壌で、天然混交林(アオギリ自生地)を形成している。

4 厚層黒ボク土壌

土色の明度、彩度ともに、2 またそれ以下の黒～黒褐色を呈する腐植質表土層(黒ボクのA層)が50cm以上の厚さを持つ土壌である。これに属する土壌統は天神原統で、火山灰を母材とし下層に褐色埴土質のB層を有している。南伊豆町天神原の緩斜地の凹部にごく小面積存在し、主に普通畑に利用されている。

5 黒ボク土壌

土色の明度、彩度ともに2 またはそれ以下の黒～黒褐色を呈する腐植質表土層(黒ボクのA層)の厚さが25cm以上50cm未満の土壌で、一般に褐～明褐色の下層に漸移する。これに属する土壌統のうち、門野統は火山灰を母材とし、下層に褐色埴土質のB層を有している。松崎町門野の平坦地に局部的に見出され、主に普通畑、樹園地に利用されている。鉢山統は、表層は暗褐色で、20cm～40cmにわ

たり風化スコリアを含む黒色の埋没腐植層をもつ。下層は暗褐色で粘質である。河津町鉢山の南側に主として分布している。

林野土壌では、梨本統、富貴野統、三坂1統である。このうち、梨本統は黒～黒褐色のA₁層、黒色のA₂層の下部に存在する暗褐色のB層中に、10～20 cm厚の軽石層を介在するが、その深さが100 cm以内にみられるところは少ない。修善寺図幅の船原統に類似するが、軽石層介在位置が深いところが異なる。この土壌は図幅北側の河津町地内の緩凸、緩斜面に広く分布し、主としてヒノキ人工林および原野として利用されている。富貴野統は前記梨本統よりやや彩度の高い黒褐色のA層を有する土壌で、西伊豆町および松崎町地内の緩凸な尾根すじに分布し、主としてスギ、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林を形成している。三坂1統は、比較的厚い黒ボク層が、やや淡いA₁層と黒～黒褐色のA₂層に分化した土壌で、再堆積となる緩凹斜面で極部的に50 cm以上の黒ボク層がみられることもある。南伊豆町入間地区周辺に広く分布し、天然広葉樹林（下層植生はササ、メダケが卓越する）や原野を形成している。

6 多湿黒ボク土壌

黒～黒褐色を呈する腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが25 cm以上で、表層とその直下の下層に斑鉄の存在がみられる土壌である。これに属する土壌統のうち、差田統は再積性の火山灰を母材とし、下層は黒～黒褐色だが表層は灰色化している。南伊豆町差田の谷底低地に分布し、主に水田に利用されている。大城統は残積性の厚層黒ボク土壌を水田化したもので、第2層に斑紋が認められる。西伊豆町大城の平坦地にごく狭い面積で存在し、主に水田として利用されている。

7 淡色黒ボク土壌

黒～黒褐色を呈する腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが25 cm以下であるか、または腐植含量が少なく表土層の黒味の弱い黒ボク土壌である。これに属する土壌統はいずれも火山灰を母材とするものであるが、そのうち石廊崎統は暗褐色で堆積土質の表土層を持つ土壌で、南伊豆町中木、下田市白浜および河津町峰の山麓斜面に分布している。主に樹園地、普通畑に利用されている。

林野土壌では蛇石1統で、極暗褐色の薄いA層を持つ土壌で、南伊豆町蛇石周辺の緩凸な尾根すじに分布し、スギ、ヒノキ人工林もしくは原野を形成している。

8 乾性褐色森林土壌

湿润温帯の森林植生下に発達するA・B・C層位配列を有する土壌である。こ

の土壌は森林植物の落葉、落枝とそれらの不完全分解物からなる粗腐植が地表面にやや厚く堆積し、その下に黒褐色のA層と褐色もしくは淡褐色のB層があり、両者の推移はやや判然としている。A層下部又はB層上部には乾燥破碎によって発達した独特な土壌構造がみられる。これに属する土壌統は大久須1統、雲見2統である。大久須1統は修善寺図幅の土壌名を踏しゅうしたが、同図幅のものより、幾分A層が暗色で、土層内の礫含量がやや多い傾向がみられる。西伊豆町、松崎町、河津町の尾根すじに分布し、ヒノキ人工林もしくは、天然広葉樹林を形成している。雲見2統は比較的厚いF層とやや淡いA層、B層の下には石礫質なC層を有する土壌で、伊豆半島南西海岸の海食崖上部斜面にみられ、天然混交林を形成している。

9 乾性褐色森林土壌（黄褐色系）

乾性褐色森林土壌の分布地帯で、比較的海拔高の低いところにみられ、暗褐色でやや発達したA層と7.5～10YRの明、彩度の高い色相を帯びた、B又はC層をもつ土壌である。これに属する土壌統は安良里1統、青野1統である。安良里1統は暗褐色のやや浅いA層と褐色のB層の下に黄褐色のC層をもつ土壌である。賀茂村安良里、西伊豆町田子地内の海岸沿にみられ、主として天然広葉樹林を形成している。青野1統は黒褐色のA₁層と暗褐色でやや淡いA₂層の下に明、彩度の高い色相をもつ、B、C層をもつ土壌である。南伊豆町青野周辺の山地に分布し、主として天然広葉樹林を形成している。

10 乾性褐色森林土壌（赤褐色系）

乾性褐色森林土壌の分布地帯で、赤色風化殻を母材とする比較的海拔高の低い山地尾根すじにみられる土壌である。これに属する土壌統は三坂2統で、やや厚いA₀(H層)と腐植の滲潤が少ない暗褐色のやや薄いA層の下に褐色のB層と明褐色のC層をもつものである。その分布域は南伊豆町、下田市、河津町地内にある。海拔高が凡そ300 m以下の尾根すじに多く、主として天然広葉樹林を形成している。

11 褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌と同様の森林帯にあるが、常に地中水分に富む斜面下部に多く現れ、黒褐色ないしは暗褐色を呈するポウ軟な厚いA層が発達し、その下部にある褐色のB層に漸変している。これに属する土壌統は大久須2統、白浜2統、須原統である。このうち大久須2統は修善寺図幅の土壌名を踏しゅうした。本図

幅に現われる大久須2統は前記図幅のものより、B層の色相がやや10 YRによる傾向がみられる。大久須1統に隣接し、その斜面下部および沢すじにあって最も広い分布域を有し、スギ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。白浜2統は極暗褐色のA層とやや厚い暗褐色のB層の下には基岩が現われる場合が多い。土性は一般に砂質であるが、特にA層がその傾向が強い。下田市の東海岸周辺にあって、砂丘地帯に接する山地斜面に分布し、混交林を形成している。須原統は大久須2統に類似するが、7.5 Y Rの色相をもつB層と土層内に赤色風化の小礫を含む点で異なる。三坂2統に隣接し、その下斜面にあってスギ、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。

12 褐色森林土壌（黄褐色系）

乾性褐色森林土壌（黄褐色系）の分布する森林帯の斜面下部にみられる。A層は暗褐色、B層又はC層はやや埴質で、7.5～10 YRの色相を有し、明度、彩度とも高い。これに属する土壌統は安良里2統、青野2統である。安良里2統は安良里1統に隣接し、その斜面下部にみられるが、安良里1統より、B、C層の色相が明度、彩度とも低い。青野2統は青野1統に接し、その下斜面に分布し、やや褐色のC₁層の下に現われるC₂層には、彩度の高い黄褐色の土層がみられる。両土壌とも天然広葉樹林として利用されている。

13 褐色森林土壌（赤褐色系）

乾性褐色森林土壌（赤褐色系）の分布する森林帯の斜面下部にみられる。これに属する土壌統は三坂3統で、暗褐色のA層、褐色のB層の下には7.5 Y Rの明度彩度の高い色相を帯びたC層がみられる土壌である。三坂2統の斜面下部にみられ、主として天然広葉樹林を形成するが、しばしばスギ、ヒノキ人工林としても利用されている。

14 湿性褐色森林土壌

上記の両褐色森林土壌と同じ森林帯に属するが、常に水が集まりやすい斜面下部や谷底の緩斜面にあらわれる。黒褐色のA層と暗褐色ないしは灰褐色のB層よりなり、両者の推移は漸変している。これに属する土壌統は大久須3統で、修善寺図幅の土壌名を踏しゅうしたが、同図幅のものよりA層が薄層である。この土壌は山脚の長い天城山系主稜部の谷底緩斜面にみられ、スギ人工林として利用されているが、その分布域は広くない。

15 赤色土壌

湿潤気候の森林下に生成した土壌で、腐植含量が低く、暗褐色の薄いA層の下には赤味の強い(5 Y Rもしくは2.5 Y Rの明度、彩度とも高い)BもしくはC層を有する土壌である。これに属する青市統は層厚の浅い暗褐色のA層と褐色のB層の下に明暗褐色のC層を有するもので、低海拔地帯の緩凸な尾根とその下斜面に多くみられる。その分布域は、南伊豆町、下田市の東部地域で海拔高が凡そ200 m以下のところに多く、主として天然広葉樹林を形成している。

16 黄色土壌

湿潤気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、薄い暗色のA層の下のB層は5 Y Rよりも黄色の色相をもつものである。一般にA層の腐植含量が低く、B層は粘土化が進み埴土質である。これに属する土壌統は、本地域においては白浜層群、湯ヶ島層群の固結堆積物、固結火山岩の風化物を母材とし、地域全体に散在している。そのうち桂統は、白浜層群の白色凝灰岩風化物を母材とし、褐色埴土質のA層の下に明褐～明黄褐色で埴土質のB層を有している。下田市大賀茂周辺の白色凝灰岩地帯の山麓緩斜面に分布し、主に樹園地に利用されている。南伊豆1統は暗褐色埴土質の薄いA層の下に褐色埴土質の厚いB層を有しており、多少の礫を含む。南伊豆町を中心に西海岸各町村の山麓緩斜面に広く分布し、主に樹園地、普通畑に利用されている。南伊豆2統は1統に似るが、礫質土層を特徴とする。南伊豆町妻良、毛倉野、下田市北湯ヶ野などの比較的起伏量の大きい地域の山麓急斜面に分布しており、段々畑の形で主に普通畑、樹園地に利用されている。西伊豆統は暗褐色の埴土層が卓越し(厚さ50 cm以上)礫を多少なりとも含む。主に急斜面に存在し、西海岸各町村に小面積ずつあまねく散在する。主に普通畑、施設園芸、樹園地に利用されている。

17 暗赤色土壌

石灰岩または塩基性岩などを母岩とする土壌で、下層土は5 Y Rの色相をもち、赤色土より明度彩度とも低い土壌である。これに属する岩地統は、暗赤褐のB層と暗赤褐で埴質なC層を有する土壌で、松崎町岩地、南伊豆町伊浜周辺に分布し、主として天然広葉樹林を形成している。

18 褐色低地土壌

A層は比較的発達せず、ほぼ全層が灰褐～褐～黄褐色を呈し、土性が中粒～細粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、大賀茂川1統は、暗灰黄色の表

土の下に黄褐色で埴壤土質の下層土を持ち、50 cm以浅に砂礫層が出現する土壤である。大賀茂川、河津川の上流の谷底低地に分布し、主に水田に利用されている。蛇石2統は灰色の表土と褐色の下層土からなり軽埴土質で、マンガン、鉄の斑紋を有するものである。山間のやや勾配の急な谷底低地（棚田地帯）に存在し、西海岸各町村に小面積ずつあまねく散在する。主に水田や樹園地（桜）に利用されている。平戸統は細粒の表土の下にあって50cm以浅から砂礫層が出現するもので、作土下に鉄の斑紋が集積して半固結状態を呈することもある。山間の急な勾配の谷底低地（棚田）に見られ、松崎町、南伊豆町に集中している。主に水田に利用されている。安良里3統は蛇石2統と似るが、土性が埴壤土質である。山間のやや急勾配の谷底低地（棚田）に見られ、西伊豆町を中心に小面積ずつ散在する。主に水田、普通畑、施設園芸に利用されている。沢田統は黒褐色の礫に富む埴壤～軽埴土質の土壤で、野畑統と同様に堂ヶ島周辺の凝灰岩地帯に産する。狭い谷底低地の出口付近に見出され、きわめて局部的である。主に普通畑に利用されている。

19 細粒灰色低地土壤

土性が細粒質で、灰色の土色を持ち、斑紋の存在がみられ、地表下50cm以内にはグライ層の出現がみられぬ土壤である。これに属する土壤統のうち、一色統は軽埴土質で灰色を呈する土壤である。青野川上流、南伊豆町吉祥の平坦な谷底低地を中心に分布し、主に水田に利用されている。青野3統は一色統と似るが、暗灰黄～灰黄褐色を呈し、マンガン斑を有する。青野川上流および河口部、那賀川下流の平坦な谷底低地に広く分布し、主に水田に利用されている。那賀統は埴壤土質の典型的な灰色低地土であり、下層（50～60 cm以下）から砂質土層が出現することがある。岩科川、那賀川、仁科川の下流の平坦低地に広く出現し、上流側は岩科川統と下流側は青野3統または正円統と接する。主に水田として利用されている。岩科川統は那賀統とよく似るが、砂質または砂礫質の土層が50cm以浅から出現する。上記3河川の平地の上流部から山間地にかけて分布し、主に水田に利用されている。子浦統は埴土質で50cm以深にグライ層を持つ土壤である。山間のやや勾配の急な谷底低地にあるが、ごく局部的である。現在休耕田となっている。

20 粗粒灰色低地土壤

土性が粗粒質で、灰色の土色を持ち、斑紋の点在がみられ、地表下50cm以内にはグライ層の出現がみられぬ土壤である。これに属する土壤統は正円統で、下層50 cm以下からグライ層が出る。仁科川の最下流に位置し、海岸沿いの砂州の後部が

自身のせき止め作用で弱い低湿化を受けたものである。主に水田に利用されている。

21 細粒灰色低地土壌－細粒グライ土壌

土性が細粒質で、グライ層の出現位置が細粒灰色低地土壌と細粒グライ土壌の境目にあたるもので、両者の中間とした。これに属する土壌統は大賀茂川2統で40～60 cm以下が暗オリーブ灰色のグライ層である。大賀茂川の中流の平坦な谷底低地に分布し、上流側は大賀茂川1統と接している。主に水田として利用されている。

22 細粒グライ土壌

土性が細粒質で、地表下50cm以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壌統のうち、小田瀬統は暗緑灰色の埴土質の強グライ土である。正円統と同じ砂州によって、小田瀬より南下する小谷の出口が塞がれて低湿化したもので、主に水田に利用されている。下賀茂統は暗オリーブ灰色で砂質埴土質のグライ層を持つ土壌であり、青野川中流に広く分布する。流域面積の広い青野川が、弓ヶ浜の砂州によって狭い河口部で閉塞されたため、中流域が低湿地化したものである。主に水田として利用されている。

23 低位泥炭土壌

地表から1 m以内に厚さ50cm以上の泥炭層、あるいは50 cm以内に厚さ20 cm以上の泥炭層を持つ土壌である。泥炭層は主としてヨシ、マコモ、ハンノキ等の低層湿原の構成植物の遺体より成る。これに属する土壌統は大池統で、分解が進み黒褐色を呈している。南伊豆町蛇石北の蛇石火山の火口に当たる凹地底に存在し現在はヨシ原野になっている。

(縣 富美夫・川口菊雄・高橋和彦・加藤芳朗・浜田竜之介)

IV 傾斜区分図

傾斜区分図は等高線の間隔をもとに、7段階に区分した結果の表現であるが、計測方法に限界があるため、局地的な傾斜は消去されてしまうことがおおい。地形的に斜面の傾斜は河川を主とする流水の侵食営力と構成物質、火山と非火山、水系の発達段階などとの相関によってきまってくる。また河川にそう平坦地や崖錐などは堆積による地形の表現である。また本図には切峰面図のような形で標高区分も記入されているが、その等高線の間隔と傾斜区分との関係も重要な視点である。

30°以上の急傾斜地の分布をみると、まず海岸にそう海食崖にそれが表現されている。伊豆半島の海岸は山地が海にせまり、つよい波食の影響とともに、半島をふちどるように崖が形成されている。とくに松崎から石廊崎にかけては連続的に発達し、波勝崎北方では赤壁ともよばれる絶壁が約200mの崖を形成している。出入りのおおい海岸の岬端部はほとんど海食崖となっている。山地や河谷にそう急傾斜地はS6～S7の区別もつきにくいいためS7の分布はすくないが、S6は河川の峡谷部の山腹斜面、河川の源流部、谷壁斜面などにみられ、下刻にともなる形成といえる。仁科川や河津川上流部に分布は広く、山腹と谷底との間に位置する場合がおおい。山地斜面の崩壊発生や山くずれの分布を詳細に検討すればS6～S7とその周辺にみられる筈である。また山地の崩壊が山頂や山腹平坦面と谷壁斜面との間の傾斜変換部に発生していることをみても斜面の不安定さの抽出に意味をもつといえる。S4～S5の分布は広く、本地域の山地の一般的傾斜の値といえる。地形的にS5は水系や谷密度の大きいひだのおおい山地にあり、ややひだの間隔が大きくなるとS4に移行するともいえる。またこれらの傾斜の分布地域にあっても、谷の源頭部、水系の下刻にともなる谷壁斜面には局地的にS6～S7の崖にあたる部分が段丘崖などには存在するが、図示されていない。

S2～S3の緩斜面は天城火山の山頂部と溶岩流低地、蛇石火山の侵食からとりのこされた平坦面部、白浜丘陵の山地、南伊豆の丘陵性山地におおい。また須崎半島の海岸段丘は下刻による谷の部分のをぞきこの段階を示す。同時に河川中流や支谷の堆積部もこの値で示されるが、地形の表現といえる。侵食による山頂平坦面の形成とともに堆積による緩斜面の形成のある場合には火山の場合は原面であるが、山腹斜面や山麓斜面の場合には、地すべりにともなる多量の土砂の移動、土石流にともなる堆積、溶岩流の流出による堆積などもこの地域では成因を考えることがで

きる。

S 1は平坦地であり河川中下流の沖積地の分布とほぼ一致する。土地利用で水田の範囲となるが、伊豆半島のように平坦地のすくない土地条件では傾斜地の段化による水田や畑地への造成も特色があり、土地利用と傾斜区分との関係では特異な性格をもった地域といえる。

(北川光雄)

V 水系・谷密度図

下田・神子元島図幅にふくまれるおもな水系は、河津川、稻生沢川、青野川、仁科川、那賀川、岩科川などその支流で、いずれも二級河川である。そのほかこれらの水系にふくまれないで直接、海に流入する小河川の水系と北部には白田川、狩野川、宇久須川などの流域の一部がふくまれている。

これらの水系の幹川流路は、図幅の中央をほぼ南北に縦断する分水界を境にして、地形の一般的傾斜にそって流路をとり、相模灘、駿河湾にむかって流出している。青野川、河津川、仁科川など、地質構造によって流路形態が支配され、直線的な谷筋をもつこともある。また南伊豆の小河川は、北西—南東方向の卓越する流路をとるが、これも断層による影響であり、水系のパターンを特色づけている。

下流部では沖積地を形成して自由に蛇行をした曲流部もみられたが、河川改修による築堤や短絡化により河川の人工化がすすんだ。とくに青野川や稻生沢川は1976年の水害を契機にして復旧工事をふくめて改修は進行した。中流から上流にかけては、山地がおおいため下刻がはげしく峡谷や滝をもつ場合もおおく、縦断面形では初期の河川もみられる。また上流部の山地における水系の発達は、樹枝状に支谷をもつ場合がおおく、開析の度合はすすんでいるし、支流が直角的に合流することもおおい。また伊豆半島の山地を構成する湯ヶ島層や白浜層群は侵食や風化によって変化しやすい岩石的性質をもつため、水系の源頭部には山地崩壊やそれともなる土石流の発生もみられ、一次水系の発達の条件となっている。

火山地域では原面と谷との傾斜の変換の明瞭であること、緩斜面や新しい火山では水系が不連続で、初期の開析状況を示しているなどの特色もある。また火山と非火山との境界、地質構造や岩相のちがう表層の境界などをもとに流路の決定していることもあり、地質の複雑さが水系網の複雑さに反映している。

谷密度も地域的なばらつきが大きく、系統的な分類は困難であるが、南伊豆の丘陵性山地は30～40の値をもっており、ひだのこまかい小支谷の発達がいちぢるしい。白浜層群の凝灰質砂岩、石英安山岩類の地域では値が大きい傾向がある。天城火山や蛇石火山などの火山体では、平坦面が残り、谷密度も局地的に数値の較差が大きくなる。また地層の境界付近に大きい値が分布することもある。局所的な数値の変動が岩相の変化の結果であるという相関をみるには計測方法にも問題が残る。

平野部は人工化がすすみ谷密度の表現が困難になるし、人工改変により山地の谷

密度を追跡しにくい場合もあり、計測を省略した部分もある。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T		
A		8	22	20	31	23	15	20	21	23	24	27	27	22	24	22	23	21	24	25		
B	4		16	30	25	25	30	20	21	23	22	27	31	22	26	30	27	25	25	26	23	
C	9	25		32	23	25	25	24	20	20	28	27	26	17	21	30	23	25	34	32	21	
D	1	18	31		22	24	22	24	17	21	26	25	31	18	24	30	21	28	31	29	26	
E	6	35	38	30		28	16	26	19	25	27	32	25	24	26	25	28	29	22	17	31	
F	1	22	30	30	20		27	21	22	33	21	23	26	25	32	34	21	16	19	6	21	
G		10	33	25	21	24		29	29	22	21	31	31	25	25	39	21	20	28	18	22	
H		4	22	23	23	19	24		28	34	23	34	26	24	30	33	30	28	19	25	29	
I			16	25	27	36	32	24		25	23	29	29	32	32	23	41	27	24	19	23	
J			10	21	24	24	20		22	18	22	30	29	31	31	27	28	24	28	18	23	
K	2	8	15	23	18	19	18	25	28		24	29	33	31	27	27	26	24	28	26	12	
L	2	9	17	26	26	23	24	28	26	32		26	28	29	27	20	29	34	30	28	14	
M	11	13	27	25	32	32	30	27	29	34	31		29	32	28	22	31	30	27	24	15	
N	5	22	21	24	32	29	29	30	33	24	33	29		27	32	35	21	38	31	33	25	10
O	7	20	25	21	25	36	26	24	21	25	32	34	25	30	34	30	22	20	27	24	4	
P	6	21	22	17	16	41	28	30	29	22	22	29	30		29	26	30	29	23	28	10	
Q	4	21	17	22	28	35	32	29	28	29	36	42	35	28	29	30	20	29	30	6		
R	2	4	14	15	25	26	33	27	33	30	34	41	25	27	31	33	17	26	18	2		
S		1	20	27	28	32	21	32	29	32	29	18	31	36	30	15	11	11	2			
T			12	25	29	30	26	34	28	30	29	22	34	23	20	13	2	11	3			
U			2	23	39	40	35	37	38	31	30	31	30	31	25	8	4	24	26	4		
V			12	33	36	35	37	43	29	29	37	33	28	30	4		3	22	21	1		
W			27	36	34	37	32	42	37	31	30	40	36	27								
X			12	32	21	32	38	44	49	33	31	23	42	12								
Y				16	34	33	33	42	37	44	42	10	15	2								
Z				4	4	23	38	38	40	37	13	2										
A'						11	27	35	32	2												
B'							14	20														

(北川光雄)

Ⅵ 土地利用現況図

1 (農 地)

本地域の東北側、河津川によって形成された谷底低地は、水田および普通畑として利用されており、キヌサヤエンドウなどの野菜の露地栽培や、カーネーション、バラなどの花きの施設栽培が盛んである。また、水稻の裏作としてワサビの実生育苗も行なわれており、県内の需要の大半を生産している。

河津川流域の山地や相模灘に面した山地には、かなり広いミカン園の分布がみられ、ミカンのほか、ナツミカン、ハッサクなどが栽培されている。ミカン園は本地域の南側、西側の山地にも各所に散在している。

本地域の東～南側、稻生沢川、大賀茂川、青野川によって形成された谷底低地は、大部分は水田として利用されているが、一部は普通畑として利用されている。青野川の谷底低地は、河口部が弓ヶ浜の砂州によって塞がれているため、排水不良で湿田が多い。稻生沢川の谷底低地のうち、下田の市街地に近いところは、農地の住宅、商工業への転用が著しく進んでいる。

本地域の西側、駿河湾に面した海岸地帯の山地斜面や小河川沿いの低地では、マーガレット、ストック、金魚草などの花き栽培が行なわれ、石廊崎周辺では、温暖な気候のもとでストレッチアなどが栽培されている。

岩科川、那賀川、仁科川によって形成された谷底低地は、大部分が水田として利用されているが、一部普通畑として利用されている。特に最近、上流域を中心に、桜餅用の桜葉栽培が増えている。これらの谷底低地のうち、仁科、松崎の市街地に近いところは、農地の住宅、商工業および観光地への転用が著しく進んでいる。

(川口菊雄・高橋和彦)

（林 地）

本地域は、伊豆半島南端に位置し、北部を除く三方は駿河湾および相模灘に接している。北部のほぼ中央に天城山脈が南北に連なり、海拔 999.8 m の猿山を筆頭に、長九郎山（995.7 m）、十郎左エ門（953.0 m）等、当地域の主要な高山がこの区域にある。

森林面積はおよそ 37,500 ha で、このうち国有林は 6,200 ha、民有林が 31,300 ha 位である。全区域面積に占める森林面積の比率（林野率）は、最低の下田市でも 76%、最高の西伊豆町では 91% と県平均の 67% を大きく上まわっているが、地形急峻の箇所が多く、地質的な関係もあり、林業の対象地とするには困難な 40° 以上の急傾斜地が 19% も含まれている。

当地域の森林は、以前には薪や炭の生産が盛んであったため、薪炭原木である広葉樹林がなお多く残っており、シイ、コナラ、サクラ、カシ、カエデ類が繁茂している。スギやヒノキの針葉樹が本格的に造林されたのは、燃料革命によって薪炭の生産が急激に減退した昭和 30 年代からであり、人工林率は賀茂村の 65.7% が最高で、地域の平均では 42% と県平均の 59% を下まわっている。また、林令構成も 30 年生以下の若令林が圧倒的に多く、人工林のほぼ 89% がこの若令林である。

以上のほか、当地域の森林の特徴としては、当地域内には風光明媚な観光地が多く、温泉も豊富で、昔から行楽地として栄えている所であり、海岸沿いには国立公園指定地域に含まれる森林が多くあることや、森林の中に、別荘地やゴルフ場が数多くつくられていることなどがあげられる。

（阿部 卓）

森 林 概 況

市町村名	林野 総面積	民 有 林						国有林
		総 数	人工林	天然林	竹 林	原 野 その他	人工林 率	
下 田 市	7,964	7,703	2,619	4,744	157	183	34	261
東 伊 豆 町	5,834	4,047	1,882	1,617	10	538	47	1,787
南 伊 豆 町	8,535	8,212	2,149	5,620	202	241	26	323
松 崎 町	7,172	6,484	3,083	3,228	74	99	48	688
河 津 町	8,428	5,066	2,648	1,839	46	533	52	3,362
西 伊 豆 町	5,948	3,678	1,977	1,581	8	112	54	2,270
賀 茂 村	3,465	3,265	2,125	930	35	175	65	200
天城湯ヶ島町	12,229	6,846	4,003	2,588	116	139	59	5,383
計	59,326	45,052	20,486	22,147	648	1,771	45	14,274

※注 1. 各市町村全域（図幅外も含む）示す。

2. 県林政課地域森林計画（1982.3.調べ）による。

1983年3月 印刷発行

土地分類基本調査

下田・神子元島

編集発行 静岡県農地森林部農地企画課
静岡市追手町9番6号

印刷 有限会社 大塚印刷事務機
静岡県志太郡大井川町上小杉
298-1